モノグラフ
中学生の世界
vol. 42

「男の子らしさ」とは

～男の子らしさに欠ける男子たち～

目次

要約とまとめ …… 2

プロローグ　性差の縮小する社会の中での男の子らしさ …… 4

第Ⅰ章　男の子らしい行為・女の子らしい行為

1．男の子のしていること …… 8
2．男子にむいていること …… 15

第Ⅱ章　男の子の女の子化

1．女の子らしい男の子 …… 18
2．おしゃれな男の子 …… 23

第Ⅲ章　男らしさ・女らしさの変化

1．生まれ変われたら …… 27
2．父親と母親とのちがい …… 32

第Ⅳ章　男の子らしさと自己評価

1．生徒たちの自己評価 …… 35
2．「男らしさ」とは …… 40
3．将来の進路 …… 43

まとめに代えて …… 47

資料1　調査票見本 …… 48
資料2　学年・性別集計表 …… 59

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

要約とまとめ

静岡大学教授
深谷昌志

① 男の子と女の子のちがい

休み時間によく遊ぶのが男子、よくしゃべるのが女子。（P.13・図5）

② 男子にむいていること

学校の中で、男子にむいているのは応援団や生徒会長、女子にむいているのは記録係や給食のもりつけ。（P.16・図7）

③ 男の子・女の子のかっこよさ・悪さ

教室に花を持ってくるような男の子はかっこ悪い（P.20・図11）、そしてカエルの解剖をよろこんでしているような女の子もかっこよくない。（P.21・図13）

④ 化粧をする男子

化粧をする男子を見かけるが、それはぜんぜんかっこよくない。（P.23・図15）

⑤ 将来、家事を担うのは

家事をするのは妻の仕事という見方は、生徒たちの間に根強い。（P.30・図21）

⑥ 父親と母親とのちがい

父親と母親のタイプにちがいが少なく、共通性が多い。そうした中で、体が丈夫なのが父親、おしゃれなのが母親となる。（P.34・図25）

⑦ 子どもの自己像

男子と女子の自己評価に差は少ないが、その中で、他人に親切と思えるのが男子、がんばりやの自己像をもっているのが女子である。（P.37・図28）

⑧　どんな子になりたいか

スタイルがよく、人気があり、自分の意見をもった子など、女子のほうが男子よりも強い願いを抱いている。（P.39・図30）

⑨　男らしさと女らしさ

頼りがいがあり、力強いのが男らしさ、おしゃれでやさしいのが女らしさ。（P.42・図34）

⑩　進路

男子の4分の1はむずかしい大学へ進みたいと願っている。（P.44・表3）

〔まとめ〕

実際の姿を見ていると、男の子らしい男子は減ったと思う。しかし、生徒たちの間では、今でも、むしろ古くさく、固すぎると思われるほどに昔ながらの性差に対応した分化意識が根強く残っている。

そうした差をふまえた上で、女子たちはたくましく積極的に生きようとしているのに対し、男子たちは頼りがいがあって力強い男の子の役割を演じられないでいる。そして、進路の面でもむずかしい大学へ入って仕事の面で活躍するのを望んでいるが、それもむずかしいのかもしれない。

男の子らしくしたいと思う。しかし、実際にはできない。そうしたひけ目意識が男の子たちから男の子らしさを奪ってしまったのかもしれない。男の子たちは男の子らしくとあまり思わずに、性差を超えて人間として生きていったらどうかと思う。

【調査概要】

対象●東京の中学1～3年生1,713人
期間●1992年2月
方法●学校通しによる質問紙調査

サンプル構成

（人）

	男子	女子	計
中1	242	227	469
中2	286	297	583
中3	333	328	661
計	861	852	1,713

プロローグ

性差の縮小する社会の中での男の子らしさ

男の子らしさの喪失

「男の子らしさ」という今回のテーマは、研究の同人会の席上での雑談からスタートした。テーマの分析を終わって雑談に入ったとき、A先生が「今、学校の部活動で手こずっていましてね。元気なのは女子の部だけで、男子のほうはガタガタなんです」。その言葉を受けて、他の先生から「うちの学校でも、先日生徒会の役員選挙があったのですが、立候補したのが女子だけで、男子を出すのに苦労しました」、また、別の先生は「これまで、告げ口をするのは女子と決まっていたのに、今では男子のほうが告げ口をする」という。

「掃除などを見ていると、女子が男子たちをあごで使って掃除をさせている感じで、男子にもうすこししっかりしろといいたくなる」や「学級を経営するとき、頼りになるのは女子だけで、男子たちはあてにならない」などの発言が続いた。

男の子たちが男の子らしさをなくしている。これまでの固定した男の子らしさはなくなってもよいように思うが、現代のように男らしさが根底から崩れてくると、「男の子らしさ」とは何かと考えてみたくなる。

母親たちの変貌

しかし、男の子らしさの喪失は、生徒だけの問題でないように思う。実際に、生徒たちの家庭でも、父親と母親との差が縮まり、父親と母親とが二人三脚をする形で、子育てをするのが定着している。

両親の役割接近を招いた要因としては、大別すると、母親もしくは女性の社会的な地位の向上に起因して、女性らしさが変質している傾向と、父親をめぐる社会状況の変化に対応する形で父親らしさが変貌している現象とが考えられる。しかし、その中では女性サイドの誘因のほうが、大きな意味を持っているように思われるので、まずそうした条件をあげ、次に、男性に起因する条件にふれることにしたい。

① 女性の高学歴化。日本の近代化が成功した鍵は、教育の普及にあるという見方が一般的だ。たしかに、明治中葉には各県に少なくとも1校の旧制中学が設置され、それに、

全国に数校の旧制高校、帝国大学も創立されて、近代的な学校制度の整備が進んだ。

しかし、そうした就学の普及は男子に限られ、曲がりなりにも、娘たちが小学校へ行き始めたのは、明治30年代だった。それに加え、女子むけに作られた高等女学校の英語や数学の授業内容は、中学の3年生程度にとどまっていた。そして、官立の専門学校は東京と奈良の女高師に限られ、私立の学校も専門学校程度の水準であった。そうした状況の許では、仮に中等教育を修了した者どうしが結婚したとしても、男性の判断力のほうが優っていて当然であろう。

それにひきかえ、現在でも中学校での男子むけ技術、女子むけ家庭科、高校での女子家庭科必修という家庭科に性差が残されていたが、それも姿を消して、男女共通教育が徹底している。さらに、女子の高校進学率はすでに男子を上回っているし、大学進学率についても、女子の伸びが男子に迫っている。

したがって、当然のことながら、今後、同水準の学歴を持つ夫婦が増加しよう。となると、持っている知識が同レベルとなるから、父親が目標を定め、母親が父親の判断に追従するというような夫婦のあり方は不自然とならざるをえない。

② 家事からの解放。長い間女性を家庭に束縛してきたのは、家事労働の負担であった。しかし、家庭電化製品が普及し、コールドチェーンやハーフ・メイドの食料品の定着、安価なレディ・メイドの衣類の大量生産などは、女性たちを家事労働から解放した。したがって、男女分業を支えていた基盤のひとつが失われ、多くの女性たちは男子と同じように、余暇や労働や学習の機会を持てるようになった。というより、男性たちが労働に従事している分だけ、家庭の主婦のほうが、多くの余暇時間を持つ時代が到来したのである。

③ 育児の社会化。幼稚園や保育所はすっかり定着し、現在では、3年保育の施設に入る子どもも増加している。そうした一方、高校はなかば義務教育化しているから、4歳を過ぎる頃から18歳まで、大学進学者は20歳過ぎても学校へ在籍している。その他、0歳児保育所や学童保育施設の充実も目立っている。そうした育児の社会化が進むにつれて、女性の就労は以前と比べはるかに容易になった。中には、教員のように、育児休職の保証されている職種も誕生している。したがって、母親になったからといって、女性が育児に専念しなくともよい時代を迎えたのである。

④ 女性のライフ・スタイルの変化。子どもが2人という核家族の生活スタイルが定着した一方で、平均寿命も伸びを示しているから、末子の小学校入学を、仮に、子どもの手がかからなくなった年齢とするなら、これが34.7歳。平均寿命の80余歳までに、50年以上の期間が残されている。それに反し昭和15年の統計を引用すれば、末子の就学が42歳、平均寿命の59歳までに17年の歳月しか残されていない。つまり、結婚して子育てをすれば、一生が終わった時代と比べ、現在では子育ての後に40年以上の歳月があるから、女性たちは、母としてではなく、ひとりの人間として生きていかねばならない。このところ主婦たちの間で、婦人学級や市民講座などへ通う学習熱が高まり、ママさんバレーなどの気運が広まっているのも、そうしたことを予感しての反応であろう。

フランスの社会学者シュルロは、示唆に富む婦人論『未来の女性』の中で、従来の母親は「遺伝形質を与える母」「産む母」「育ての母」という3つの役割を担ってきたといっている。試験管ベビーの誕生は、第一と第二の母親とが、必ずしも同一の女性である必要がないことを明らかにしたが、日本の場合でも0歳児保育所などの普及は、「産みの母」と「育ての母」との分割を可能にした。

われわれは、ともすると母親という言葉に「やさしさ」や「暖かさ」を連想する。しかし現在では、母性についても科学的なメスが入れられ、乳幼児の育児に安定した環境作りが不可欠だが、それは産みの母がたえずつきそうことを意味しない。しかし、産みの母が

保育するのが望ましいのは事実だから、母親が長期不在の場合、複数の人間が擬制の母性を作り、一貫した保育をすれば弊害は少ないなどの成果がだされている。

つまり、伝統的に「女性的」あるいは「母性的」といわれてきた現象の多くは、その社会の時代的な制約から由来したものであって、女性特有のものでない可能性が強い。したがって、家事や育児から解放された女性たちが、自然のままに生き始めると、今後母親の姿が大きな変化をとげると思わねばならない。

父親たちの変貌

このように、今後、母親たちは伝統的な意味での女性らしさから離脱し、個性的な生き方を模索している。そうした母親の動きと呼応するように父親のサイドにも、伝統的な父親らしさから脱皮せざるをえない条件が備わってきている。それは、

① 職場に生きがいを見いだしにくい。現代は組織の巨大化の時代といわれる。そして、大企業と中小企業との両極化が進み、近年の傾向では大企業の優位は否定しがたい。しかし、大企業では大型コンピューターの導入などにより、少数の意志決定者を除くと、全体計画のわからないまま断片化された仕事に従事する者の増加を招く。機械化により、肉体的な疲労を伴う仕事は減少してきた。また、週休2日制の採用、労働時間の短縮など、労働条件の改善も2～30年前と比較すれば隔世の感すらある。しかし、チャップリンが「モダンタイムス」で描いたような、仕事からの人間疎外、つまり職場に生きがいを見いだしにくい状況を迎えている。特にわが国の場合、企業の中に擬似家族制が浸透し、多くの男性は、職場の中で精神的な安定を得ていただけに、疎外のもたらすショックは大きいといわねばならない。

② 地域社会の崩壊。職場に生きがいを見いだせなくとも、地域社会が機能しているなら、父親たちは、地域での活動に生きがいを託すことができる。しかし、伝統的な地域社会は、都市化や工業化の渦にまきこまれて、はるか昔に消滅した。とはいえ、多くの地域では新しい市民意識に根ざした町作りが行われていない。したがって、職場から退却してきた父親たちは、地域を越えていっきに、家庭の中に生きがいを託そうとする。

家庭の束縛から脱出しようという母親と、家庭の中に生きがいを見つけようとする父親。進むべきベクトルは正反対だが、そうした両者の気持ちが交差し、たまたまバランスを保っているのが現代の両親像なのかもしれない。

③ 家庭内での役割を見いだしにくい。父親たちは、家庭の内に充足感を見いだそうとする。しかし、父親は家庭の中での生活に慣れていない。なにしろ、彼らが育った頃の父親は昔の世代に属するから、横のものを縦にすることなく、威厳に充ちた存在であったろう。したがって、現代の父親のモデルとはなりにくい。かといって今の父親の多くは、男の子としてのしつけを受けてきたから、たとえ暇なときでも、ほうちょうを片手に台所に立つ気にも、気軽に洗濯物を干すわけにもいかない。その上、子どもと接する機会も少ないので、子どもの心情がいまひとつ理解しにくい。昔の父親のようにもなりたくないが、そうした反面、母親の役割もとりたくない。その上新しい父親像がいまひとつはっきりしない。結局、ほどほどにきびしく、ほどほどにやさしい、折衷の産物のような父親の姿が誕生することになる。

もちろん、問題をもうすこしマクロにとらえるなら、父親の変貌を促進する要因は、その他にも多く考えられる。

④ 流動的な社会の到来。固定化された社会のほうが父親の見識が子どもに役立つので、父親の権威が高まるといわれる。そうした意味でいえば、知識の陳腐化が進み、価値観の変動の大きな流動性社会の到来は、そのこと自体で父親の権威を保ちにくくしているともいえよう。

⑤ 豊かな社会の出現。貧しい社会のほうが金銭のありがたみがわかる。現在のように

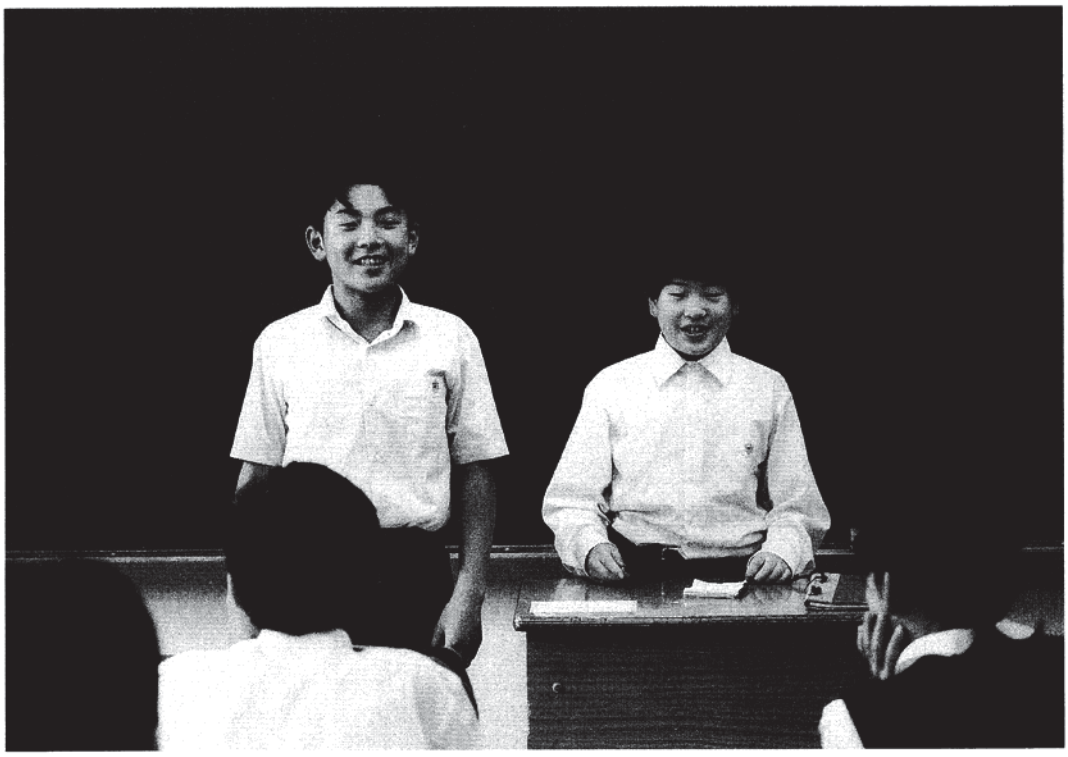
誰でもがある程度の収入を獲得できる社会は、家計維持者としての父親の権威を低下させよう。

⑥　民主主義の浸透。民主主義とは成員の平等を基本として成り立っている。したがって現在のように、社会生活全般に民主主義の風潮が強まってくると、父親だけが特権を発揮することがむずかしくなる。

⑦　情報化社会の進展。家庭の中にいても、テレビを通して世界の動きが飛びこんでくる。そうした情報社会は、社会と家庭とのかけ橋としての父親の役割を低下させた。

このように考えてくると、今後ますます父親と母親との役割が接近するモノ・セックス化の傾向は避けられないように思われてくる。いずれにせよ、親たちの間で性差が少なくなっているのであるから、子どもたちの間で男らしさが薄れていってもやむをえないように思う。

第Ⅰ章 男の子らしい行為・女の子らしい行為



1．男の子のしていること

男の子らしさ、女の子らしさを考えるにあたって、まず身近な生活面での性差から押さえてみよう。

まず、学校へ持っていくものについては、**図1**のようにハンカチやティッシュペーパーを持っていく生徒が多いが、これを男女別にみると、女子が持っていて、男子が持っていないのはヘアブラシ、リップクリーム、鏡となる。男子のほうがしゃれっけがない感じだが、女子も中学生の場合、おしゃれといっても学校へ持っていくのはリップクリームくらいなのであろう（**図2**）。

それでは、実際の行動面で、男女差は認められるのか。中学生がふだんしていそうなことを12項目列挙してみると、**図3**の通りとなる。

そこで、そうした行動に性差が認められるかを分析したのが**図4**となる。

①女子のほうがすることがきわめて多い項目
　1．リップクリームをつける
　2．「セブンティーン」などの雑誌を読む
　3．友だちと長電話をする
　4．好きな作家の本を読む
②男子のほうがすることが多い項目
　1．マンガ雑誌を読む

全体として、女子はリップクリームや長電話など、目につく行動が多いが、男子にはそうした特性を見いだしにくい。

しかし、いくつかの行動をあげ、それが男

子生徒に多いか、それとも女子生徒に多いかをたずねると**図5**の通りとなる。

①男子のほうが多い項目
1．冗談を言う
2．休み時間に外で遊ぶ
3．暴力をふるう
4．忘れ物が多い

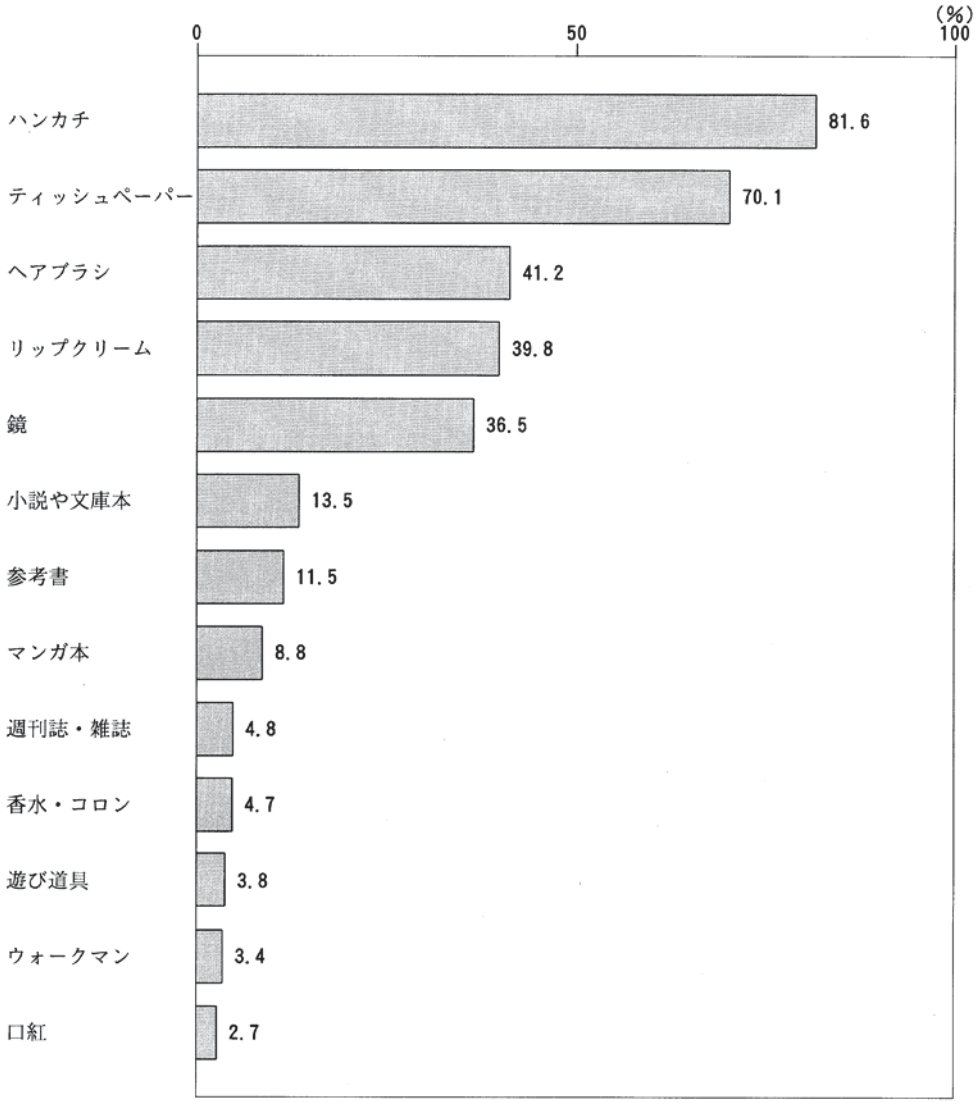
②男子、女子のどちらともいえないが、男子のほうに多い項目
1．手をあげて発表する
2．よくおこる

③男子、女子のどちらともいえないが、女子のほうに多い項目
1．よくしゃべる
2．委員に立候補する
3．自習のとき、まじめに勉強する
4．先生の言いつけを守る

そして上述のような見方について、男女と

（図1）学校へ持っていくか

→ハンカチとティッシュペーパー

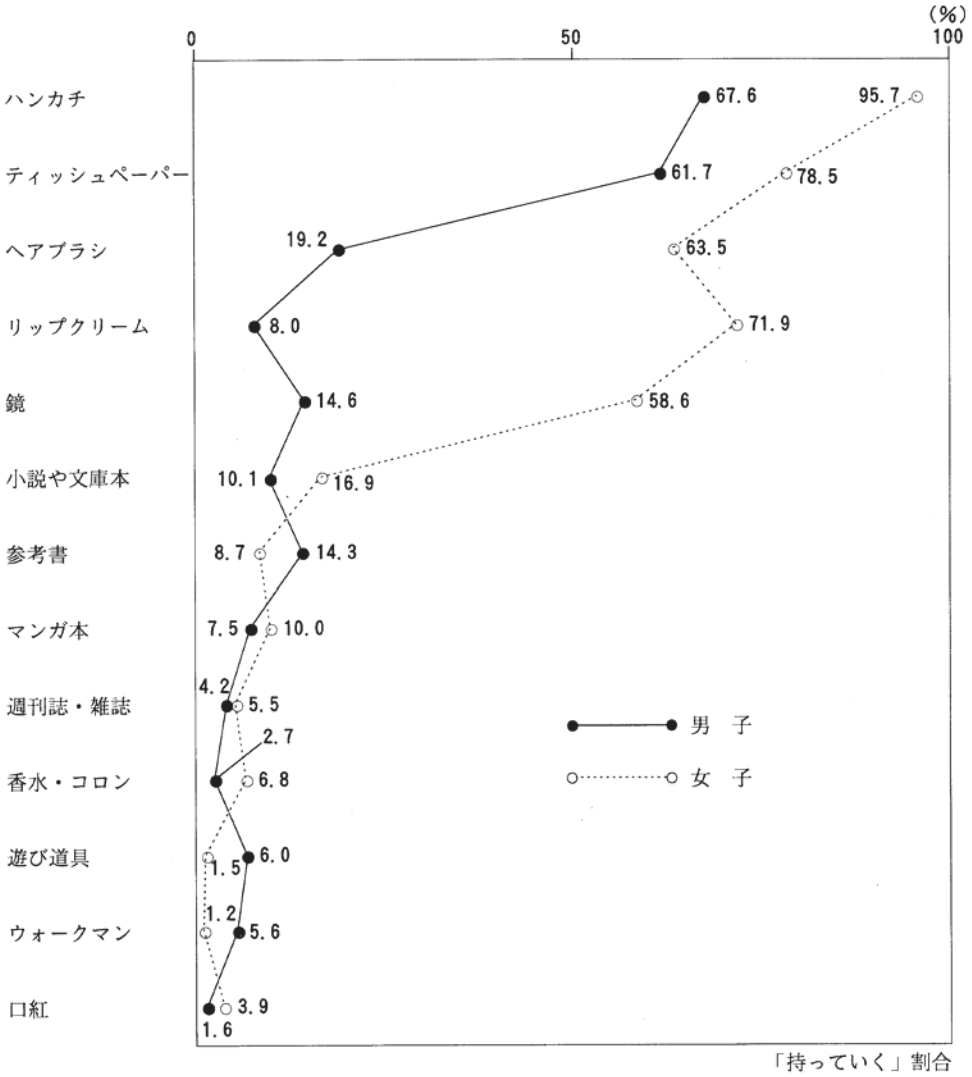


「持っていく」割合

も同じような評価を与えているのは**図6**の示す通りだが、こう見てくると、冗談を言い、すごく乱暴なのが男子、それに対し、先生の言いつけを守り、まじめなのが女子という感じになる。

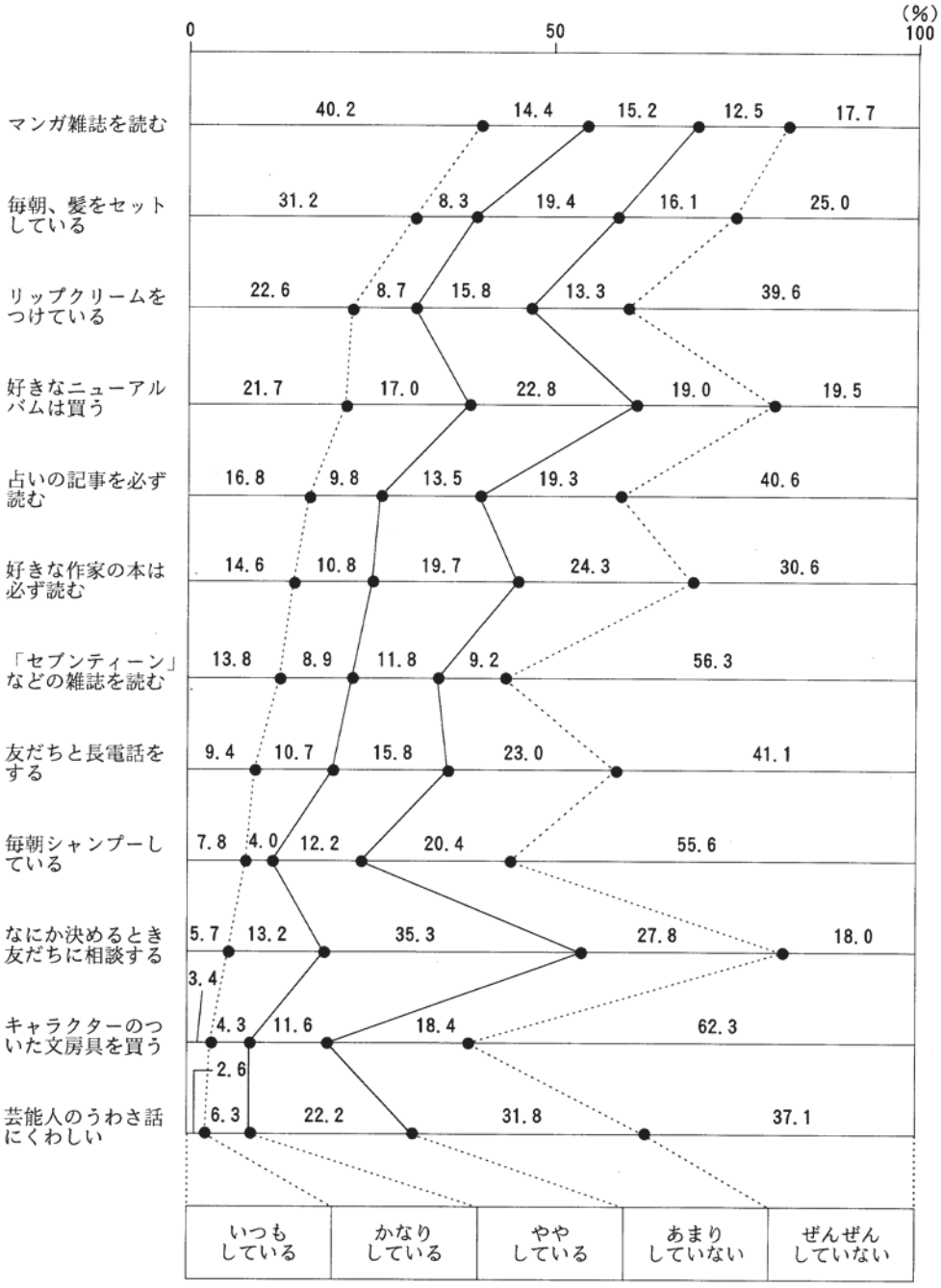
（図2）学校へ持っていくか × 性別

→ヘアブラシやリップクリームは女子



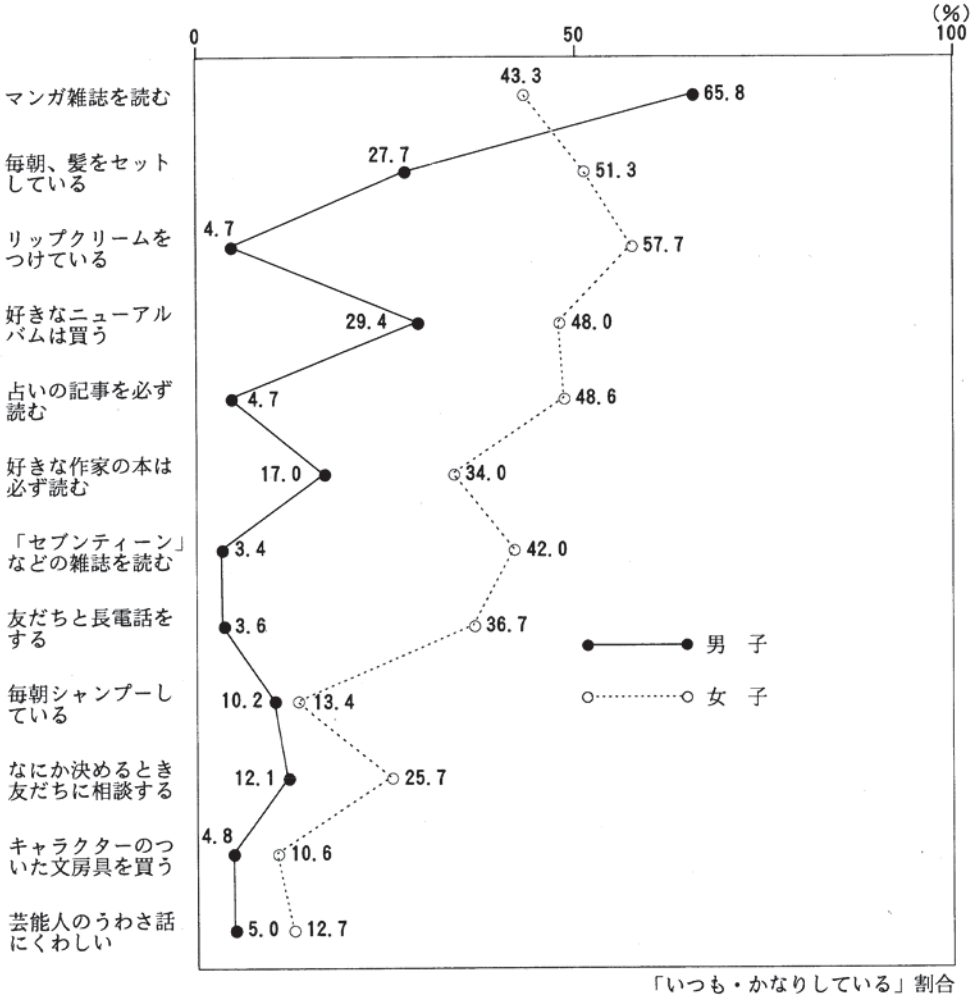
（図３）どのくらいしているか

└──→マンガ雑誌を読む



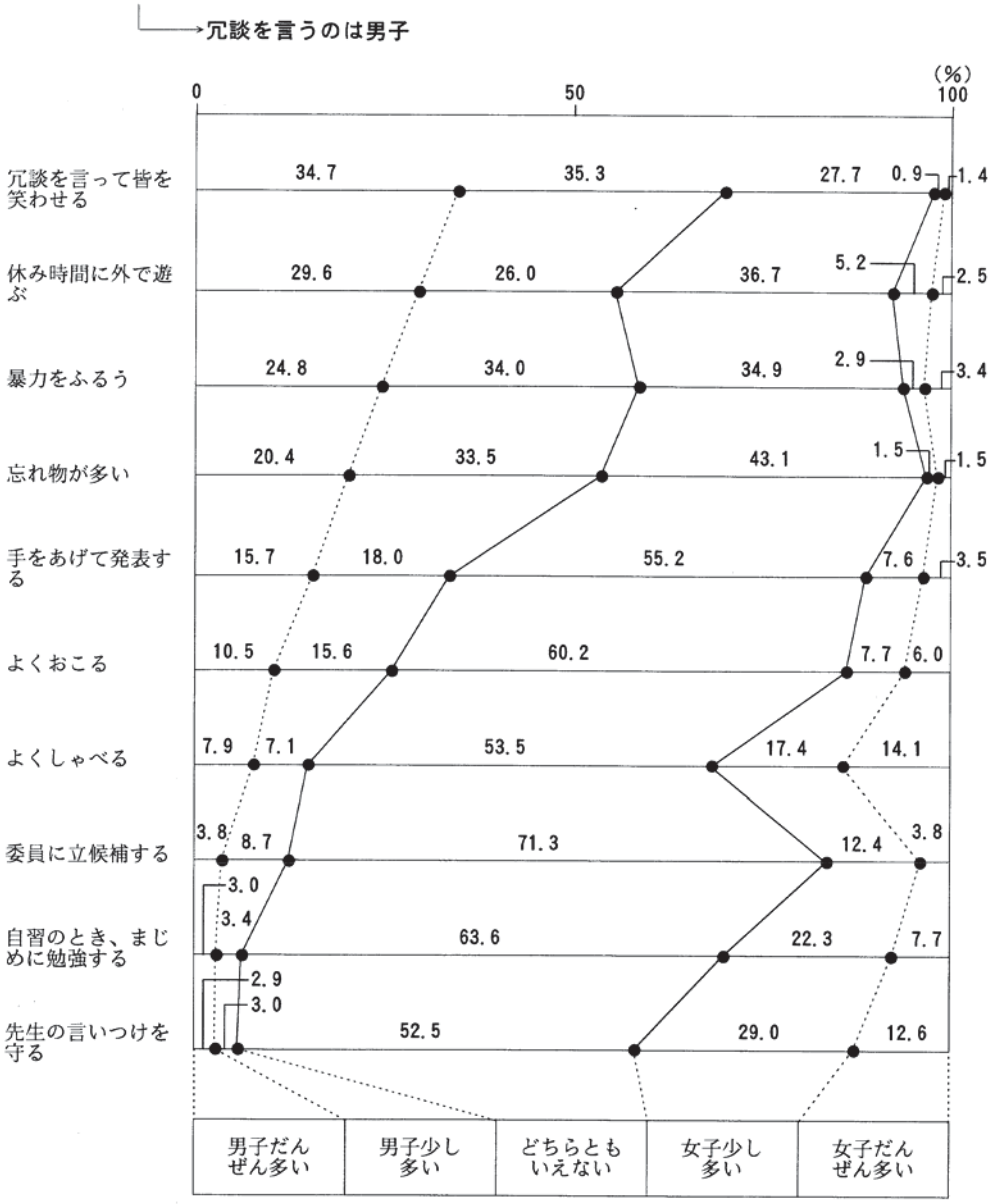
（図４）どのくらいしているか × 性別

└──→女子はリップクリームをつける



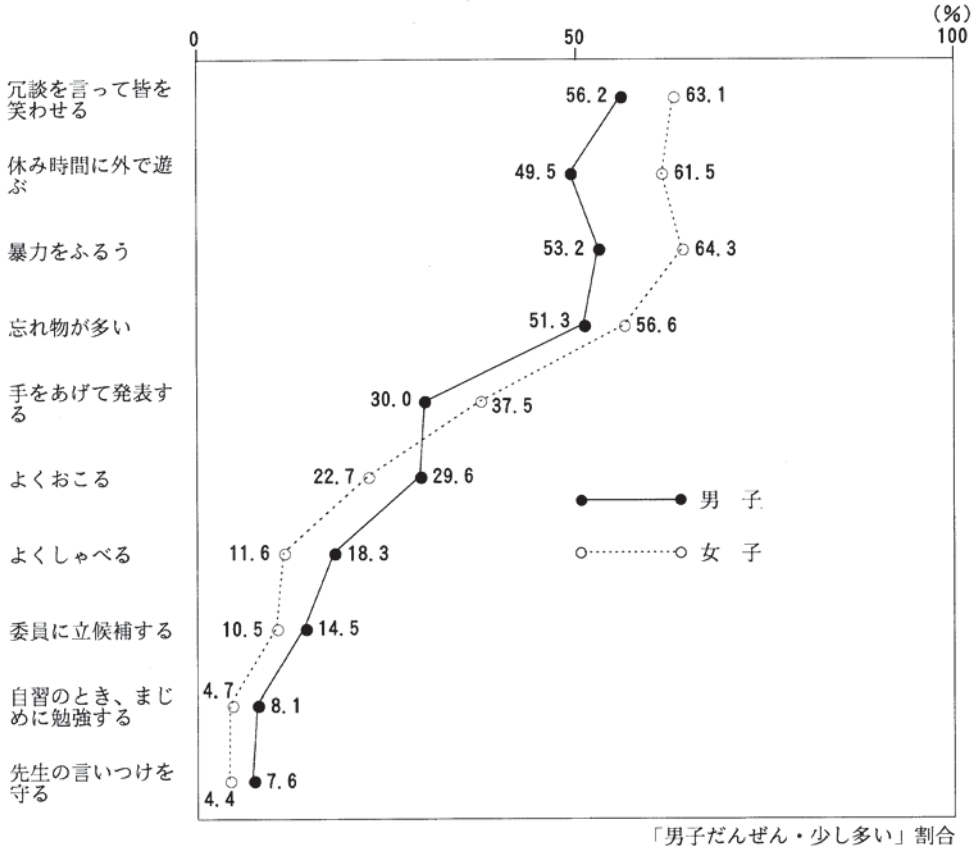
「いつも・かなりしている」割合

（図５）男女どちらが多いか



（図６）男女どちらが多いか × 性別

└→男女とも同じ評価



「男子だんぜん・少し多い」割合

2．男子にむいていること

学校の中には、性差をあらわにしない慣行が定着している。少なくとも、女子だから、男子だからといって、してはいけないことなどは現代の学校には存在していない。しかしそれは制度的なたてまえで、実際には男子と女子との役割のちがいみたいなものが存在するように思われる。

そこで、学校でのいくつかの活動場面について、そうした行為が男子むきか女子むきかをたずねてみた。

結果は**図7**の通りで、これを以下のような4つのタイプに分けることができよう。

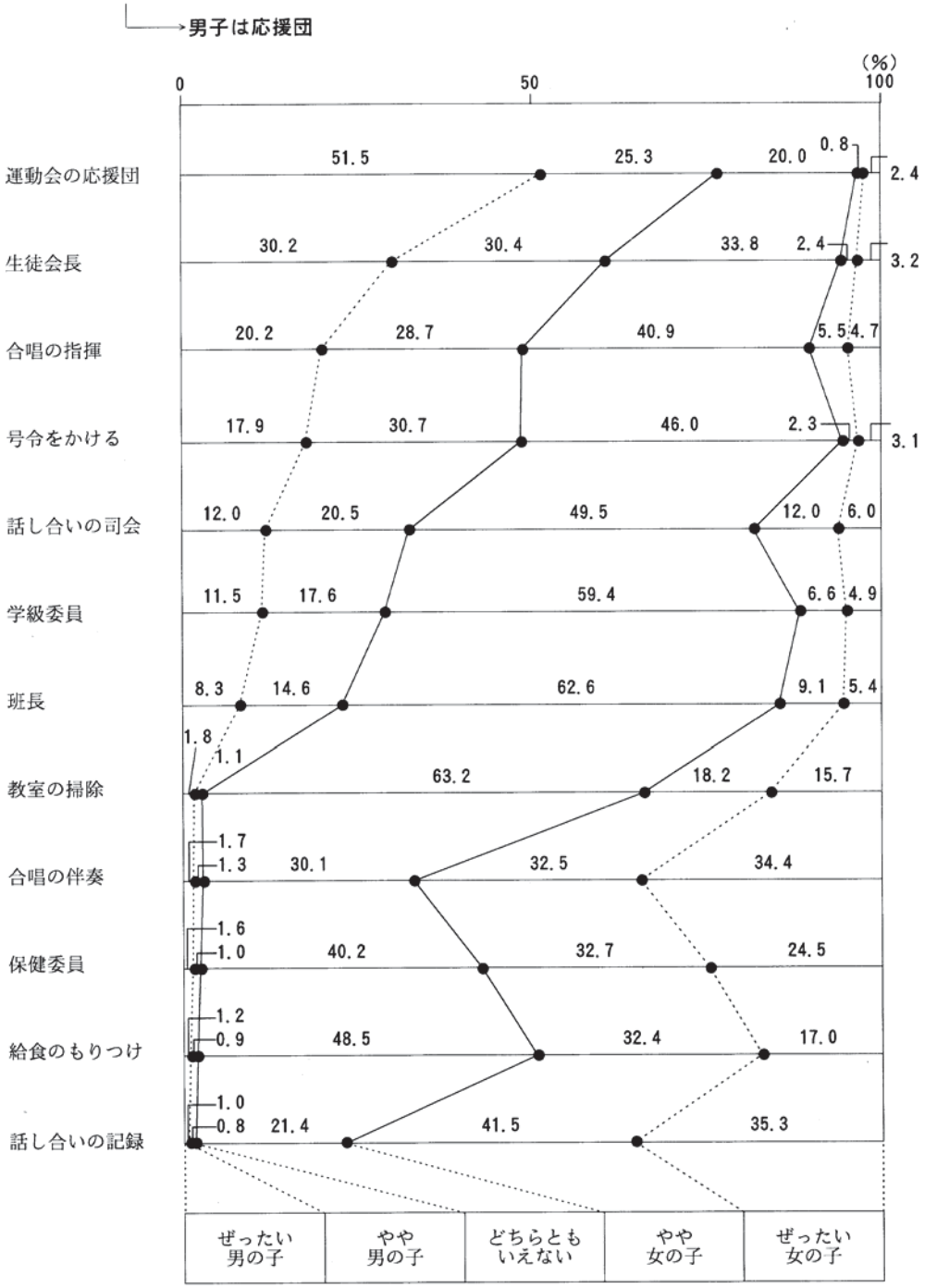
①男子にむいているという回答が多い項目
　1．運動会の応援団
　2．生徒会長
　3．合唱の指揮
②男子、女子のどちらともいえないが、やや男子むきの項目
　1．号令をかける
　2．話し合いの司会
　3．学級委員
　4．班長
③男子、女子のどちらともいえないが、やや女子むきの項目
　1．教室の掃除
④女子にむいているという回答の多い項目
　1．合唱の伴奏
　2．保健委員
　3．給食のもりつけ
　4．話し合いの記録

つきつめていうと、応援団をしたり、生徒会長をするのが男子、それに対し、給食のもりつけをするのが女子という感じである。

この結果について、男女の差が少なくなった現在にしては、男子と女子の役割の開きが大きすぎるとみることもできよう。しかし、ほとんどの項目で男女「どちらともいえない」が4割前後に達している結果も得られている。したがって見方によっては、生徒たちの間に性的な役割分業の意識が根強く残っているのも確かだが、そうした一方、性差の固定化された見方が少しずつ薄れてきているようにも思える。少なくとも、男子、女子とはっきり分けられない中間領域が増加している。

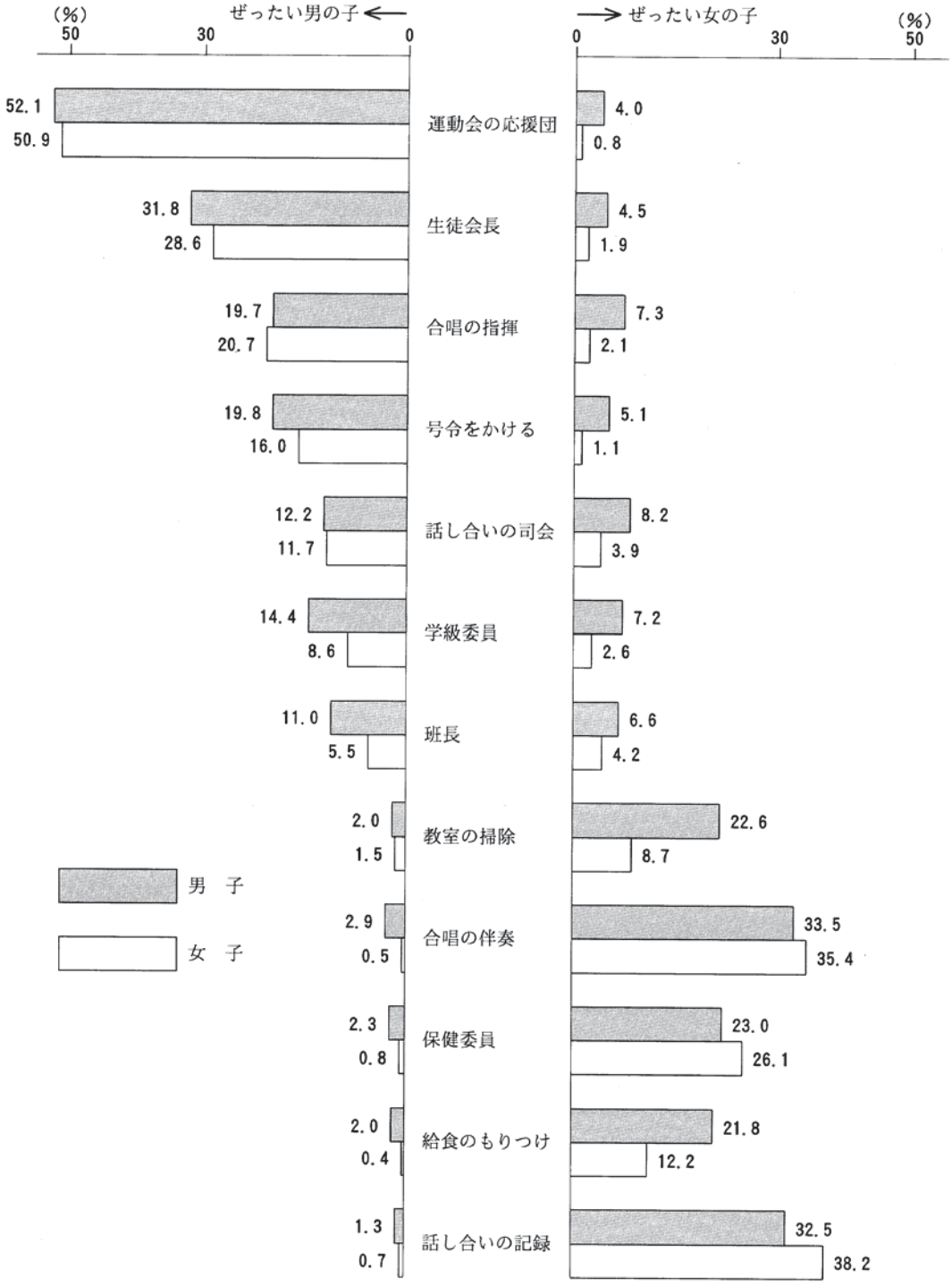
なお**図8**によれば、図7の男女の役割分業的な見方を男子だけでなく、女子も受け入れているのがわかる。「話し合いの記録」は女子に「ぜったいむいている」と思っている生徒は、男子は33％に達しているが、女子の38％もそう感じている。したがって、男子だけでなく、女子も伝統的な性的な役割を受け止めているといえよう。

（図７）男女どちらがむいているか

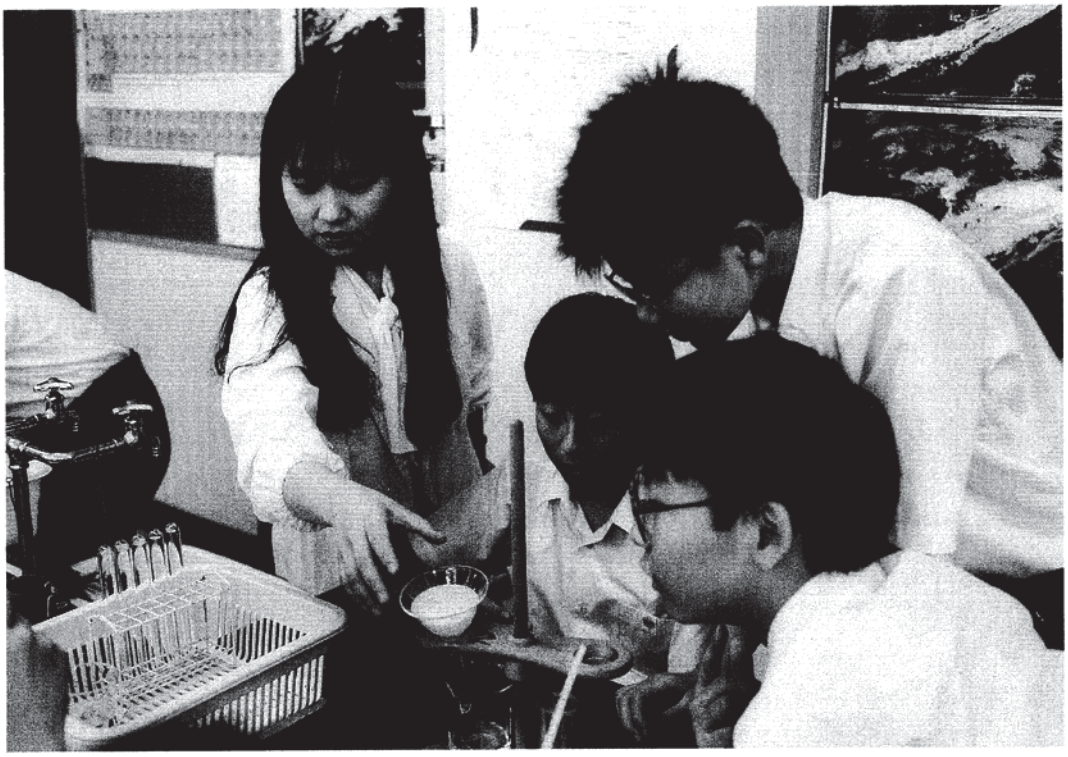


（図８）男女どちらがむいているか × 性別

└──→男女とも同じ評価



第Ⅱ章　男の子の女の子化



1．女の子らしい男の子

これまでの考察によると、中学生たちは予想していた以上に、昔ながらの男らしさ、女らしさにこだわっているように見える。

しかし、こうした結論をだす前に、もう少し別の観点からの検討を加えたいと思う。**図9**に示したように、「男の子は女の子をリードすべきだ」「男の子は頼りになる」などについて「とても」に「わりと」を加えるとほぼ4割が「そう思う」と答え、これに「少しそう思う」を加えると7割前後がそう考えている。しかも**図10**によれば、「男の子は女の子に親切にすべきだ」「男の子は女の子をリードすべきだ」などと思っているのは、男子よりも女子のほうが多い。

中学生は男女の差にもっとも敏感になる年齢であろう。それだけに、他の年齢層以上に男女差がシャープになりがちなのかもしれない。

そこでもう少し、男らしさや女らしさをくわしく調べるために、これまでの社会だと男の子らしくないといわれる行動をとりあげ、そうしたことをする男子を「かっこいい」と思うかどうかをたずねてみた。

結果は**図11**の通りで「休んだ友だちにノートを貸してあげる男の子」は「とても」とまでいわないが、かなり感じがいい。しかし「自分で弁当を作ってくるような男の子」は「かっこよくない」と思う者が76％を占める。

そして、図11を性別にクロスさせた**図12**によれば、男子よりは女子のほうが「作詞作曲をするような男の子」を「かっこいい」と思う者が１割近く多い。男子が思っている以上に、女子は心やさしい男子に好感をもっているように見える。

それでは、女子については女の子らしくないという評価はゆらいでいるのであろうか。結果は**図13**の通りだが、「意見をはっきり言う女子」を「かっこいい」と思っている者が「とても」の32％に「かなり」の38％を含めて70％に達する。また、「行事の企画進行をする女子」を好ましいと思っている者も63％と３分の２に迫っている。

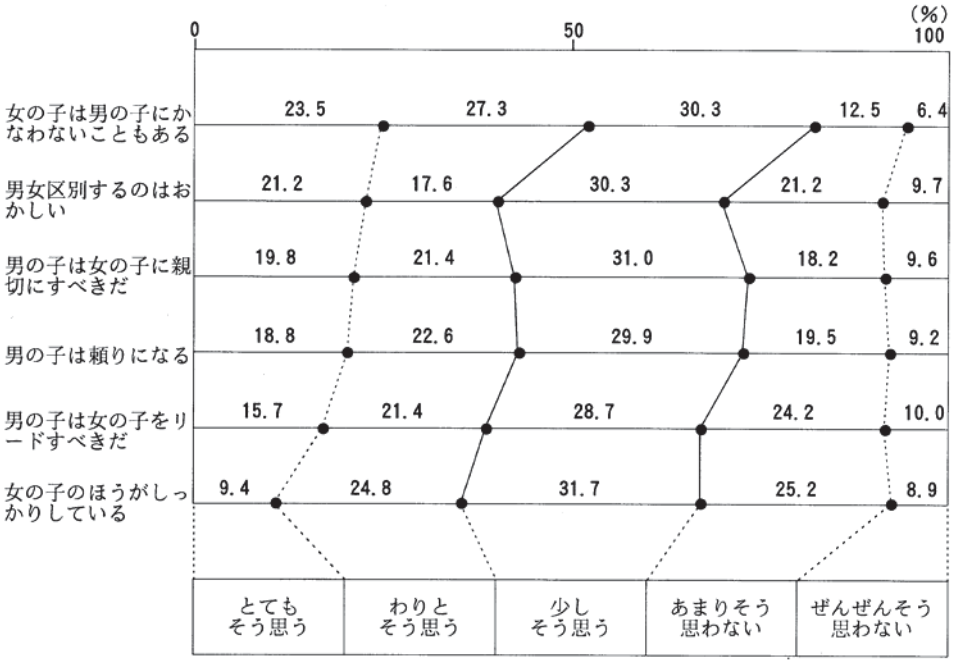
もっとも、活動的な女子を「かっこいい」と思っているのは女子だけで、男子は反発しているのかもしれない。そうしたことを懸念して図13を性別にクロスさせてみると、**図14**のような結果が得られる。

女子たちは当然のことながら、「意見をはっきり言う女子」や「応援団長をする女子」を「かっこいい」と思っている。しかし、男子たちは女子が思うほどには「かっこいい」と感じていないように思える。例えば、「応援団長をする女子」を「かっこいい」と思う女子は69％に達するのに、男子でそう思う者は36％と４割を下回る。

したがって、これらの２つの図を合わせて考えると、男子のやさしさを女子は歓迎している。そうはいっても女子の活発さは男子は敬遠している。そして全体としては、男子にやさしさが増し、女子に活発さが増加しているので、性的な役割の差は縮小しているように思われる。少なくとも女子たちはこれまでの制約を超えて、かなり積極性をもっているのがわかるが、男子の場合、女子に比べるとなんとなく自信に欠ける感じがする。

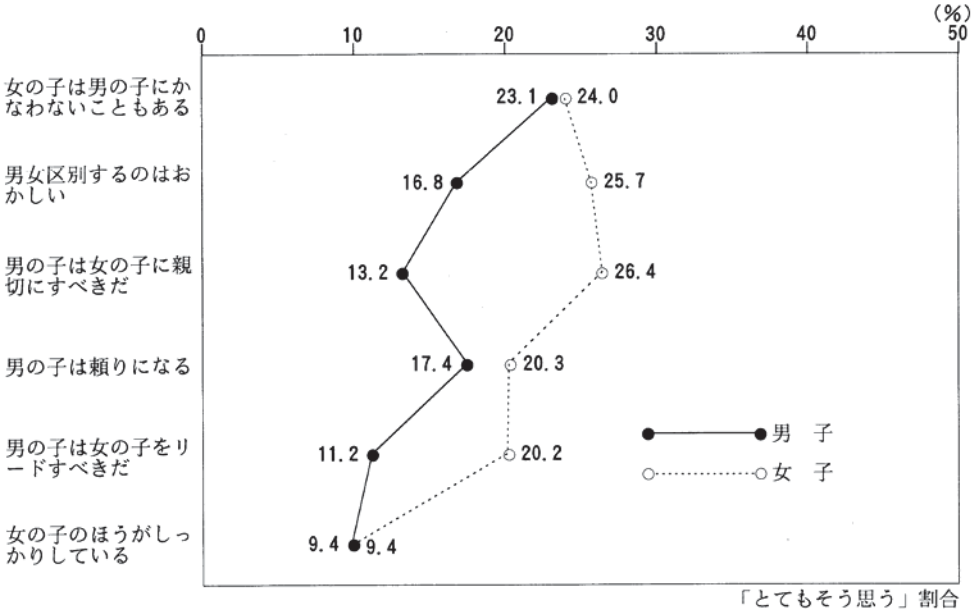
（図９）男子のリード

→男子はまあ頼りになる



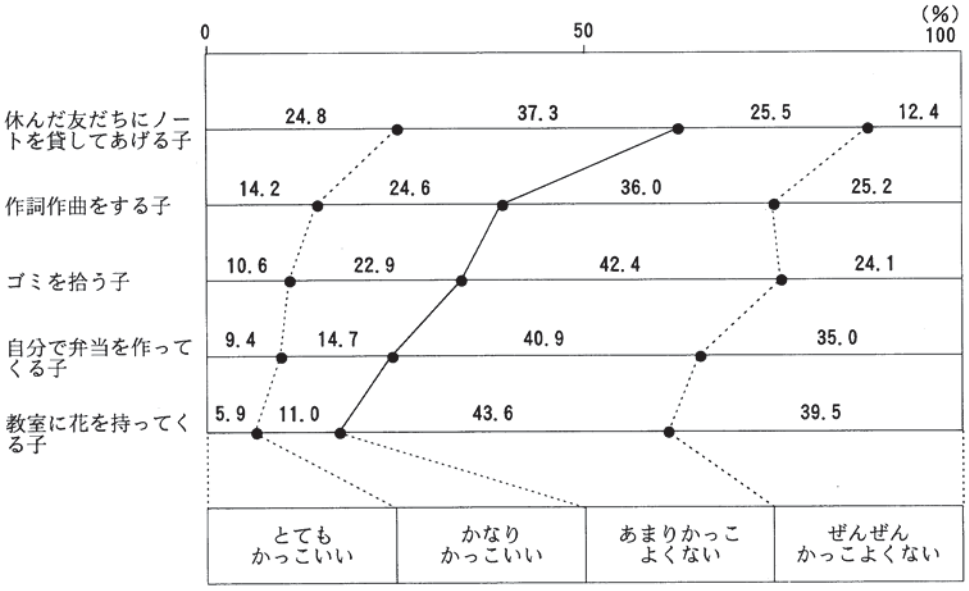
（図10）男子のリード × 性別

└→女子のほうがそう願っている



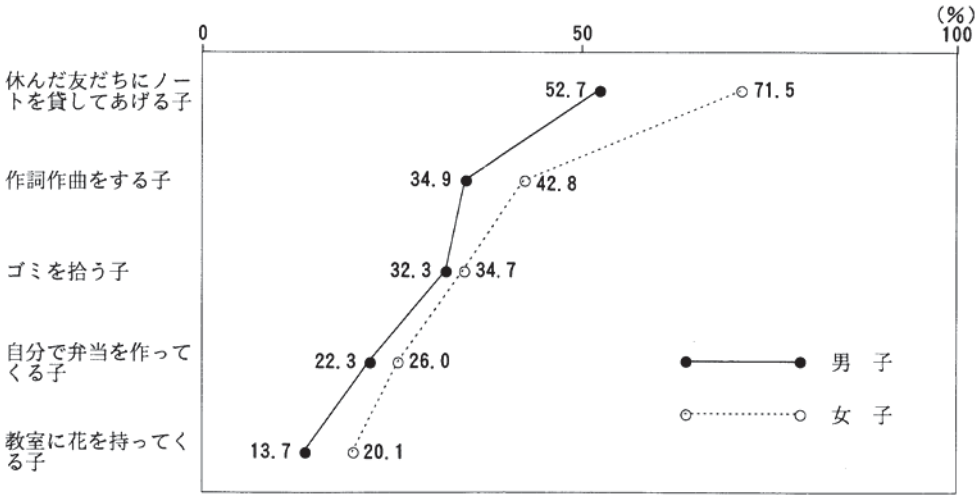
（図11）こんな男の子がいたら

└→弁当を作る子はかっこ悪い



（図12）こんな男の子がいたら × 性別

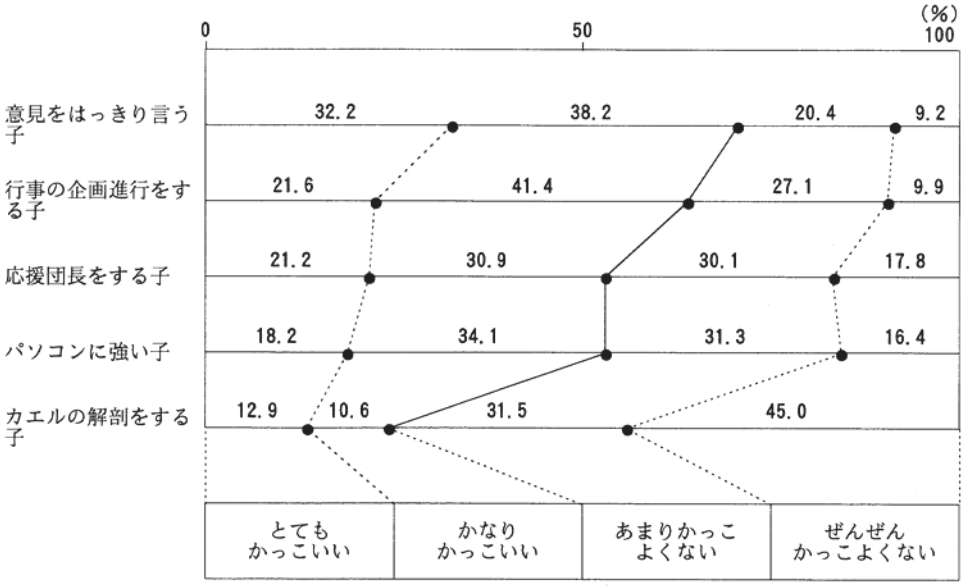
└──→女の子はやさしい子が好き



「とても・かなりかっこいい」割合

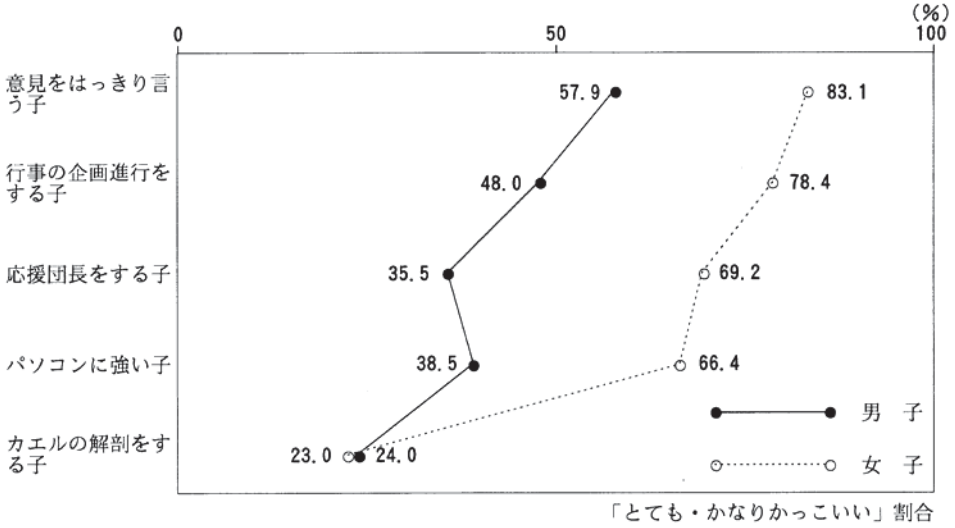
（図13）こんな女の子がいたら

└──→意見を言う女子はかっこいい



（図14）こんな女の子がいたら × 性別

└──→男子ははっきり言う女子を敬遠



2．おしゃれな男の子

このところ、おしゃれな男子が増加している。特に、大学生などの場合、ピアスをしていたり、ロングヘアの男子を見かける機会がまれではない。

もちろん、中学生のうちからそうした行為をすることはないが、男子たちの様変わりを中学生たちはどう感じているのか。**図15**によれば、「化粧をする男子」や「ダイエットをする男子」を「かっこいい」と思っている者は1割以下にとどまる。そして、「ぜんぜんかっこよくない」と思っている者が5割を超える。

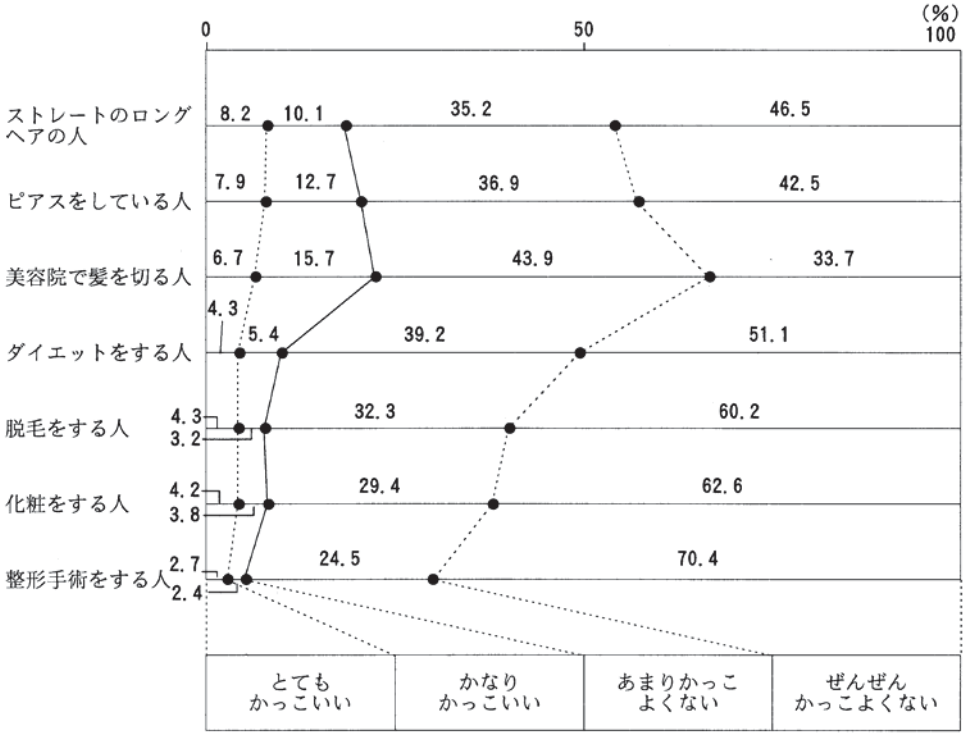
したがって、若者たちの様変わりを中学生たちはそれほど好ましいと思っていない。そして**図16**によれば、「ピアスをつけている男子」を男子より女子のほうが「かっこいい」と思っている割合が多い。女子たちは、おしゃれな男子にそれほど反発することなく、むしろ好奇心をもって見守っている感じがする。

もうひとつ**図17**に目を通してほしい。図17は、これまで男子の行動と思われてきたことについて、現在もそう思っているかどうかをたずねた結果を示している。

男子だから「重い物を運ぶ」のは当然という考え方に対し、「そう思う」割合は6割にとどまる。そして、「女性に親切にする」に

（図15）次のような男の人をどう考えるか

→男子のピアスはよくない



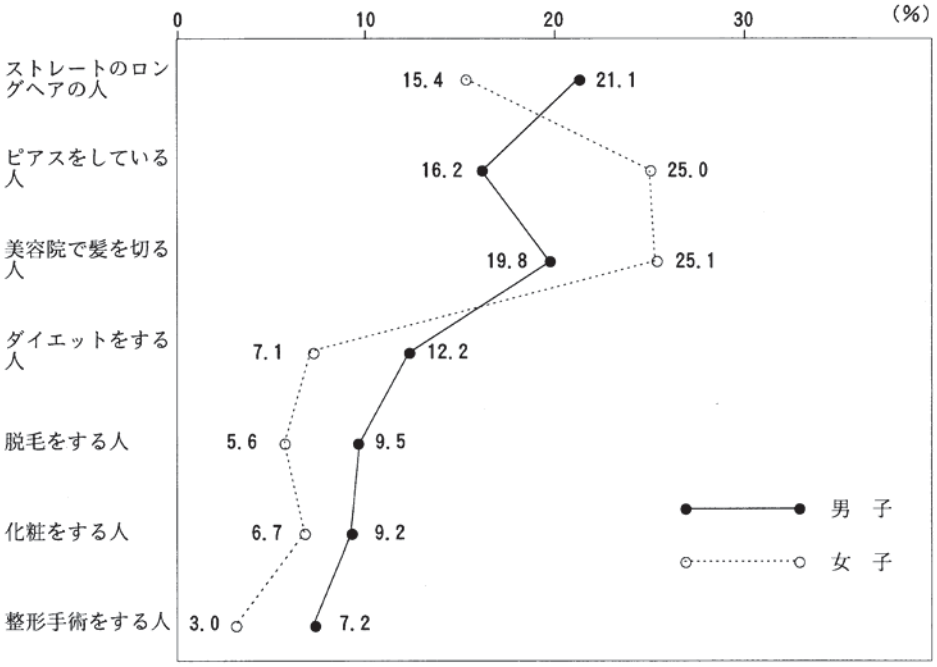
ついても「そう思う」が56％、「そう思わない」が44％と、反応がほぼ半ばしている。

そして**図18**のように、男の子らしさにそれほどこだわらないという反応は男子、女子ともにそう考える傾向が得られている。

このように生徒たちの間で、男子、女子の差は予想される以上に意識されてはいたが、その反面、男子、女子を固定的にとらえる態

（図16）次のような男の人をどう考えるか × 性別

→男女とも敬遠

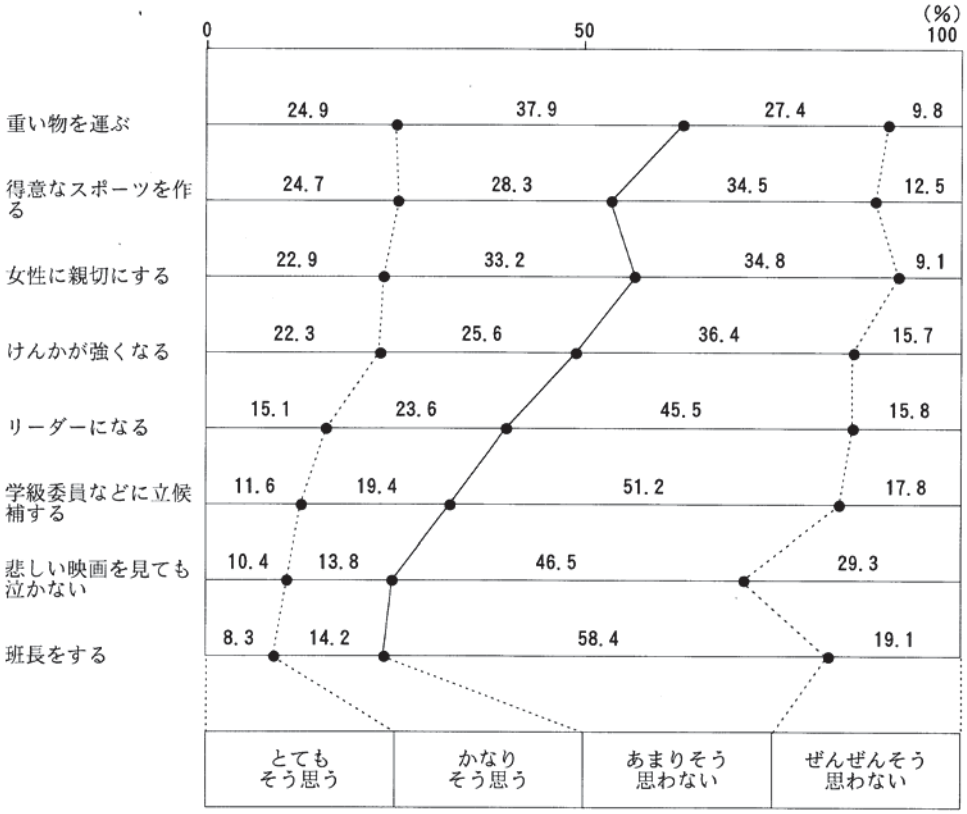


「とても・かなりかっこいい」割合

度は薄れているのも確かだった。そして特に、女子を中心にやさしい男子、活気のある女子を歓迎する傾向が目につく。その限りでは、性差は縮小されつつある。しかし、だからといって、男の子が女の子のようになるのは好ましくないし、女の子の男の子化も歓迎しないというのが、全体としての反応のように思われる。

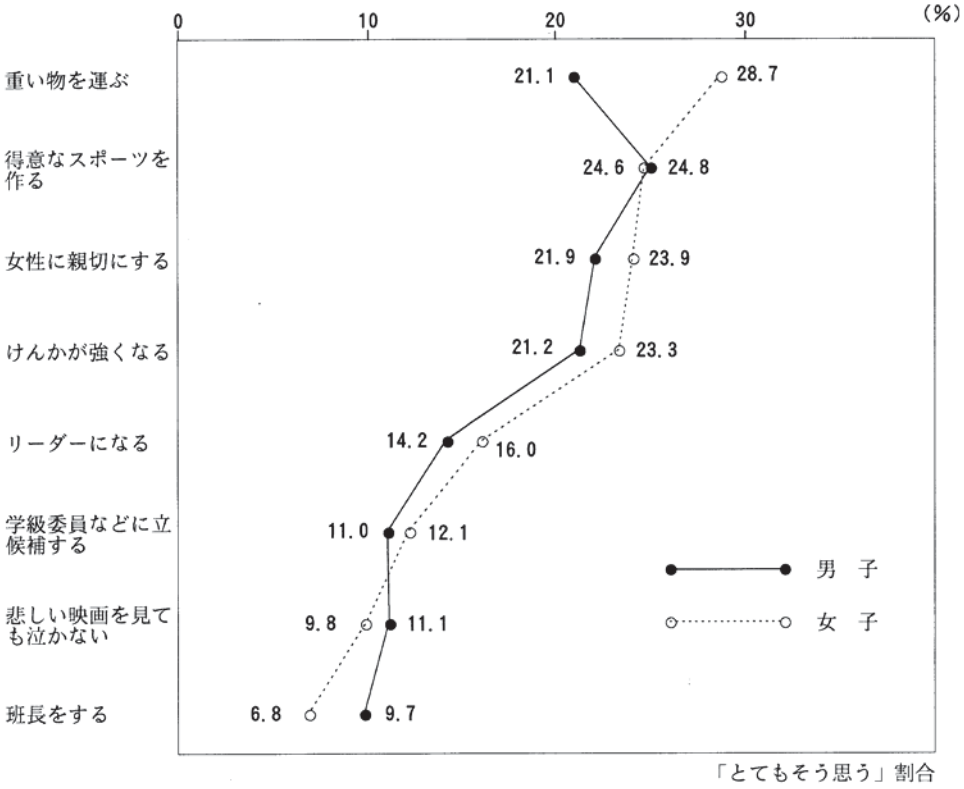
（図17）「男の子だから」しなければ

→リーダーは男子に限らない



（図18）「男の子だから」しなければ × 性別

→男女の差はない



「とてもそう思う」割合

第Ⅲ章　男らしさ・女らしさの変化

1．生まれ変われたら

これまでふれたように、男の子らしさ、あるいは女の子らしさはある程度まで変化をみせ、性差がゆらいでいるのは確かだが、性差については昔ながらの感じを残していた。

そこで以下；やや角度を変えて、男らしさ、女らしさの設問を続けてみよう。**図19**は「生まれ変われたら、男子に生まれたいか、それとも女子のほうがよいか」をたずねた結果で、この設問は性差を考えるにあたって有効性を発揮するといわれる。

これまでの社会では、女性に生まれるとさまざまな不利益をこうむるので、女性たちは生まれ変われるなら、男性に生まれたいと考えてきた。しかし現代のように、女性の生き方が好感をもってみられる時代になると、女性たちの中で「女性に生まれてもよい」と思う割合が増加する。それと同じように、男子たちはこれまで男子として生まれてくるのを当然のように願っていた。

図19によると、「できれば」を含めると89％の男子は「男子に生まれたい」と答えている。それに対し、女子で「女子に生まれたい」のは45％で、残りの55％は「男子に生まれたい」という。

女性にとって生きやすくなったのが現代だといわれる。それでも女子にとっては、やはり男子に生まれたほうがよいというのであろうか。

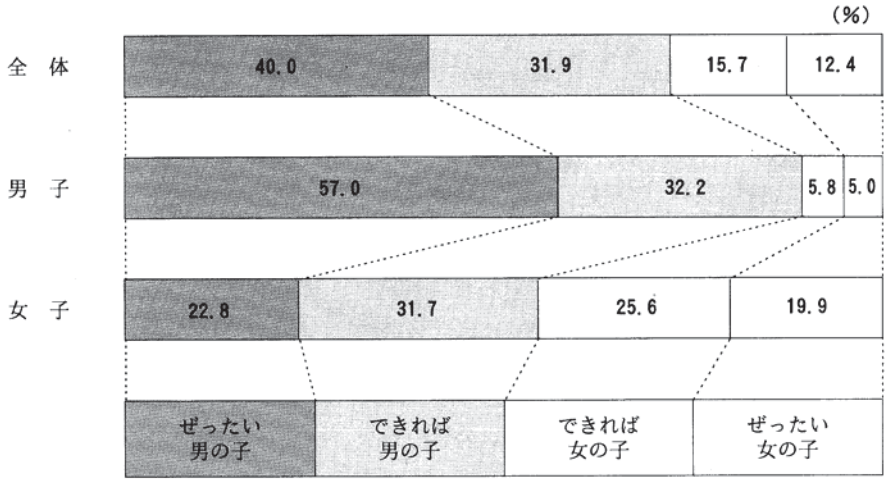
なお**表1**によれば、結婚するとしたら妻の年齢のほうが1～2歳年下のほうがよいという反応が半数に迫っている。生徒たちがこれまでの結婚の形を継承しているような印象を受ける。そして、女性の生き方についての質問では**図20**にように、「結婚したら家庭に入る」「子どもが生まれたら家庭に入る」「子どもが大きくなったらまた仕事をする」「家庭と仕事を両立させる」とに意見が四分されている。しかも男子、女子とで性別に集計し直してみても、これといった際立った傾向は得られない。

それだけ、生き方の選択がむずかしいのかもしれないが、換言するなら、こうした基本的な問題についての生き方は変わりにくいのかもしれない。

図21に、家事や育児を誰がするのがよいのかを示した。「洗濯物を干す」に例をとると、

(図19) 生まれ変わるなら

→女子は半々



「いつも妻がする」が39％、それに「だいたい妻がする」が31％で、両者を加算すると70％の生徒が「洗濯」は女性の仕事と思っている感じになる。そして、「赤ちゃんをお風呂に入れる」を除くと、「洗濯物を干す」から「料理を作る」、そして「おしめを替える」まで、家事については「妻の仕事」と思っている生徒が過半数を超える。

しかも**図22**に示したように、「家事は妻の仕事」と思っているのは、男子だけでなく女子のほうが、むしろ、そう考えている割合が高い。

これだけ世の中が変わっているのに、家事は妻がするというコンセプトが、根強く子どもたちの間に浸透している。そう考えると、性的な役割分業は崩れたといっても、土台そのものは変わっていないように思う。

（表１）夫妻の年齢

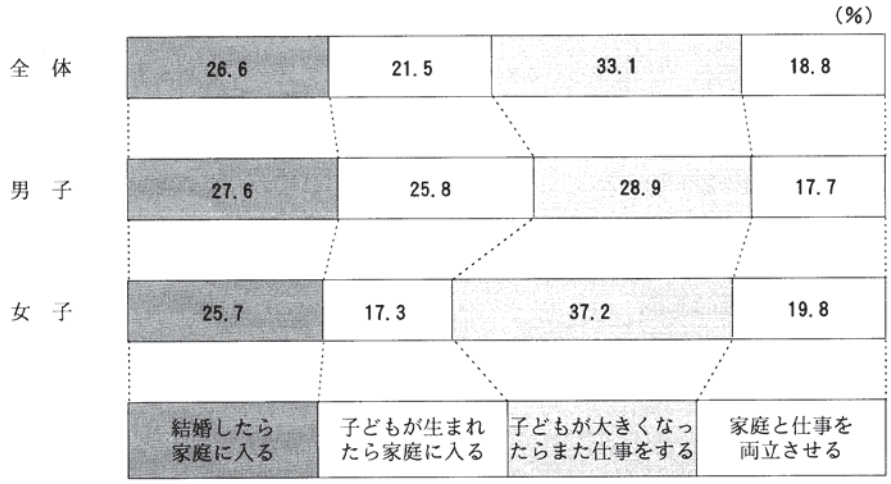
妻が１～２歳年下

（%）

	全　体	男　子	女　子
妻が３歳以上年上	1.5	2.2	0.8
妻が１～２歳年上	4.7	5.6	3.8
同じ年	33.0	39.5	26.6
妻が１～２歳年下	45.6	40.4	50.6
妻が３～５歳年下	12.9	10.6	15.3
妻が７歳以上年下	2.3	1.7	2.9

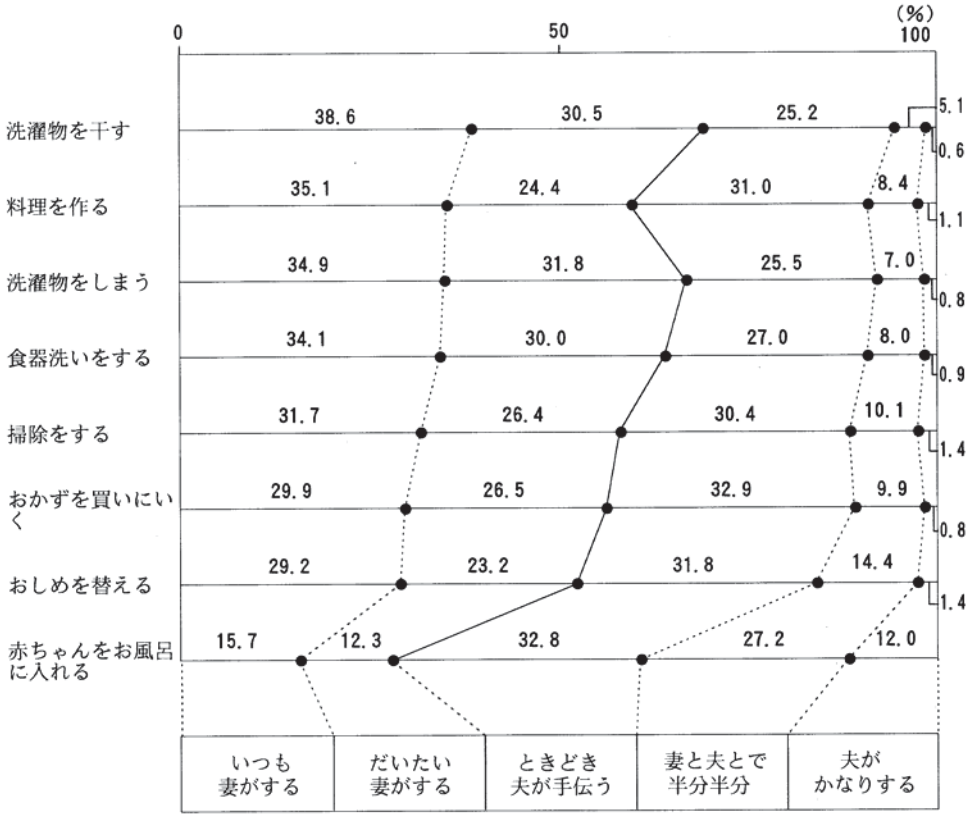
（図20）女性の生き方

└→意見が分かれる



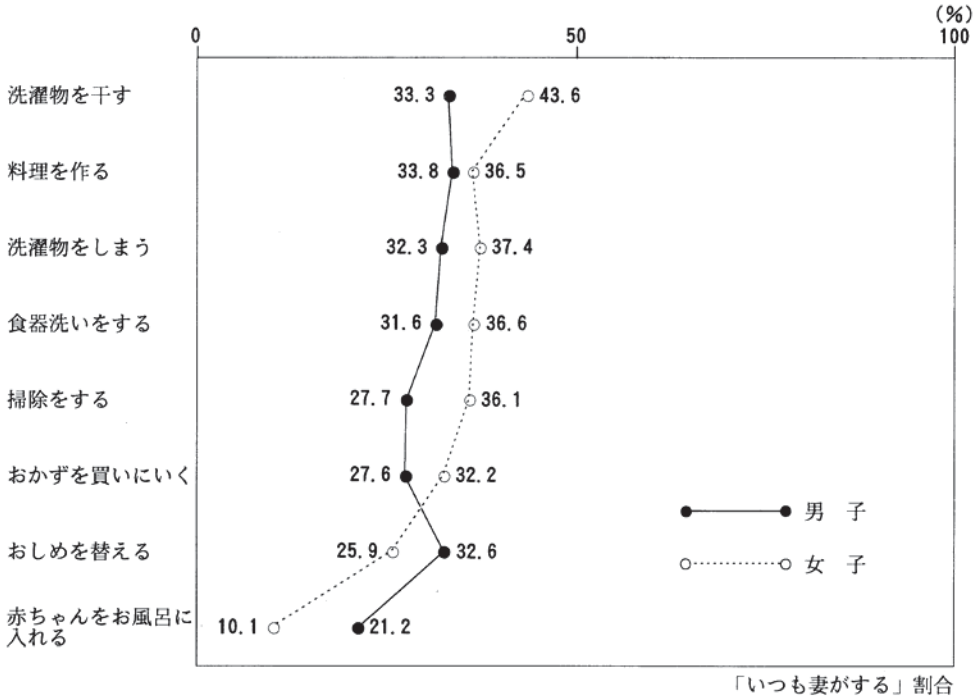
（図21）家事・育児は誰がするか

└→妻がするほうがよい



（図22）家事・育児は誰がするか × 性別

└──→女子もそう思っている



2．父親と母親とのちがい

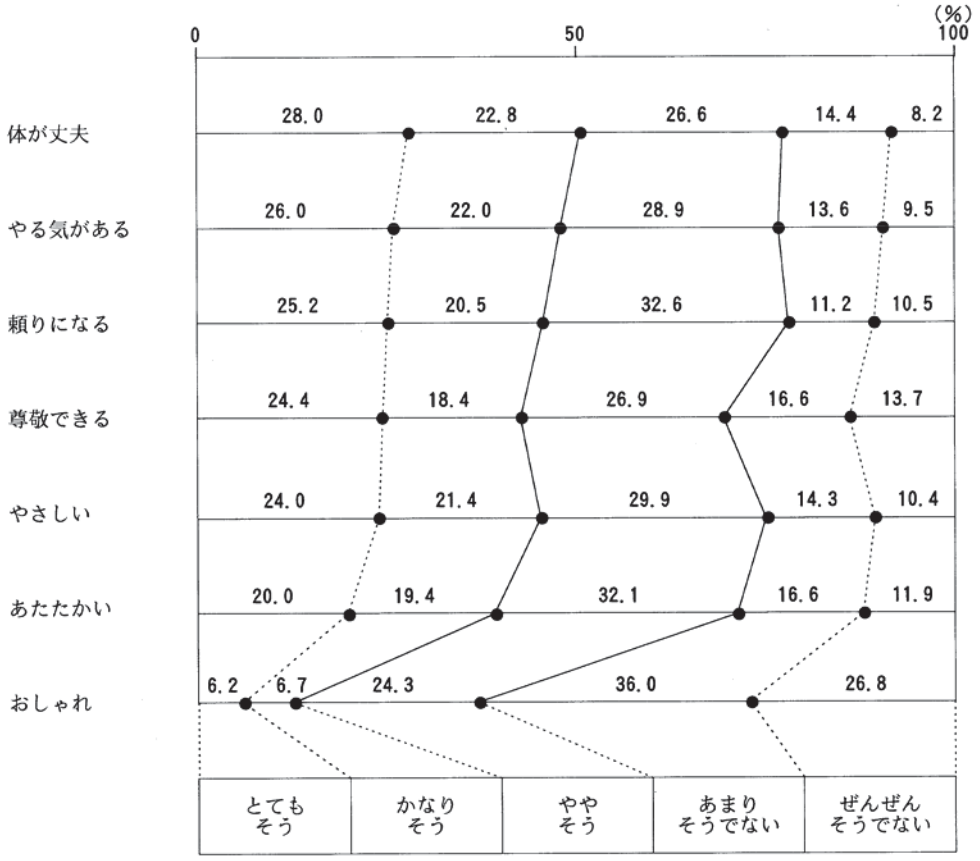
そこで改めて、父親についてのイメージをたずねてみた。結果は**図23**のように「体が丈夫で」「やる気がある」のが父親という声が多い。しかし、「とてもそう」の割合は28％にとどまっており、見方によると、はっきりと性格がわかりにくいのが現代の父親のようにも思える。

それでは、母親はどういうタイプなのか。**図24**によれば、「やる気があり」「頼りになり」「尊敬できる」などの数値が過半数に迫っている。

改めてふれるまでもなく、「やる気」や「頼りになる」は、母親というより父親のイメージだったように思う。それにもかかわらず母親に「頼りになる」というような感じが抱かれている。

そこで、父親と母親のイメージを重ね合わせてみると、**図25**のようになる。父親と母親のイメージがほぼ重なっているのは明らかだが、これは母親が父親と同じ、あるいはそれ

（図23）お父さんのタイプ



以上に「頼りになり、尊敬できる」と思われていることと、父親が母親と同じように「やさしく、あたたかい」存在であるのを示している。

そうした中で、父親と母親との間に差が生まれているのは以下の２点である。

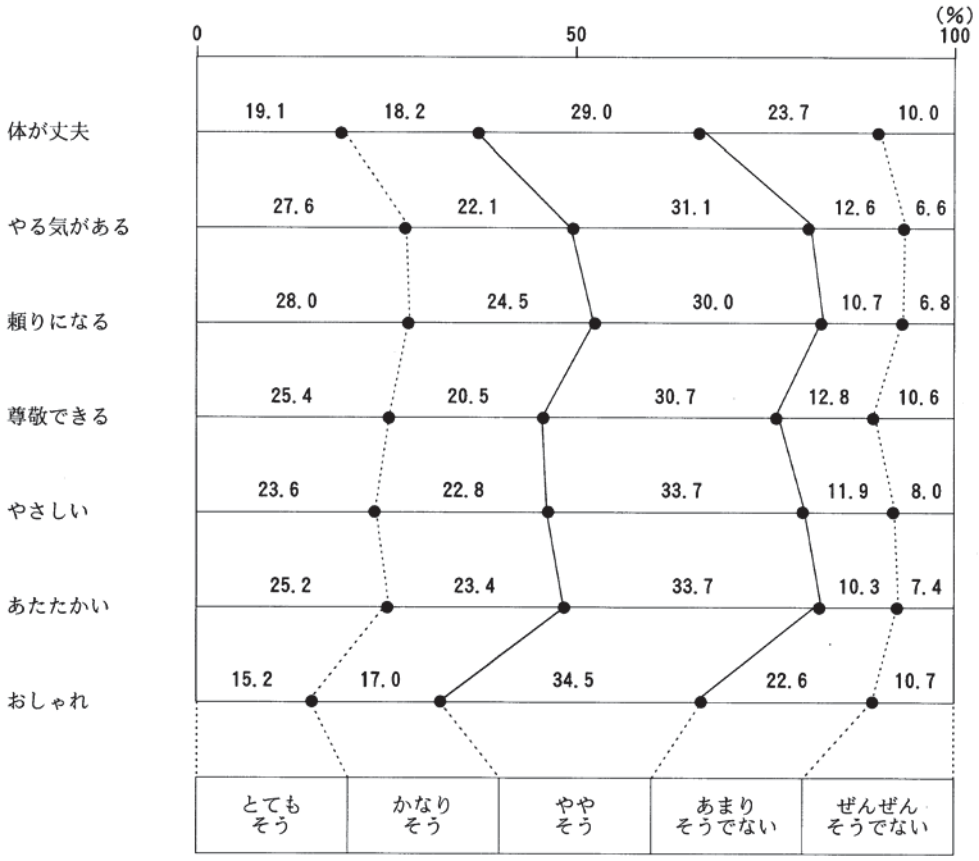
体が丈夫――父親
おしゃれ――母親

つまり、父親と母親はともにやる気があり、やさしくて尊敬できるが、そうした共通性をふまえた上で、体が丈夫なのが父親、おしゃれなのが母親というのである。

この両親像を子どもたちの性差にダブらせてみると、男子と女子とはそれほど変わらない。しかし、そうした中で、丈夫なのが男子、おしゃれなのが女子となるのであろうか。

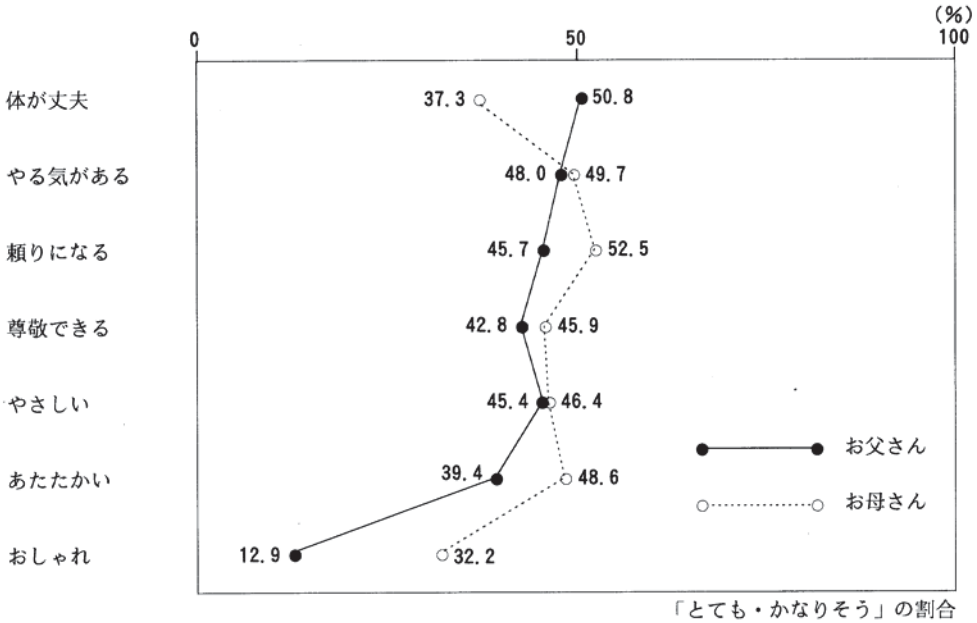
もっとも、**図26**によれば、家事を手伝っている父親はきわめて少ない。現実の役割となると、父親が仕事をしに外へ行き、母親はパートなどもするが、家の中のきりもりをするという性的な役割の分業が現在でも残っている。したがって見方によると、意識面で、男女の差が薄くなったのは確かであろうが、実態面では男女差は今なお残っているといえよう。こうした面が生徒たちの性差意識に影響を及ぼしているように思う。

（図24）お母さんのタイプ



(図25) お父さん・お母さんのタイプ

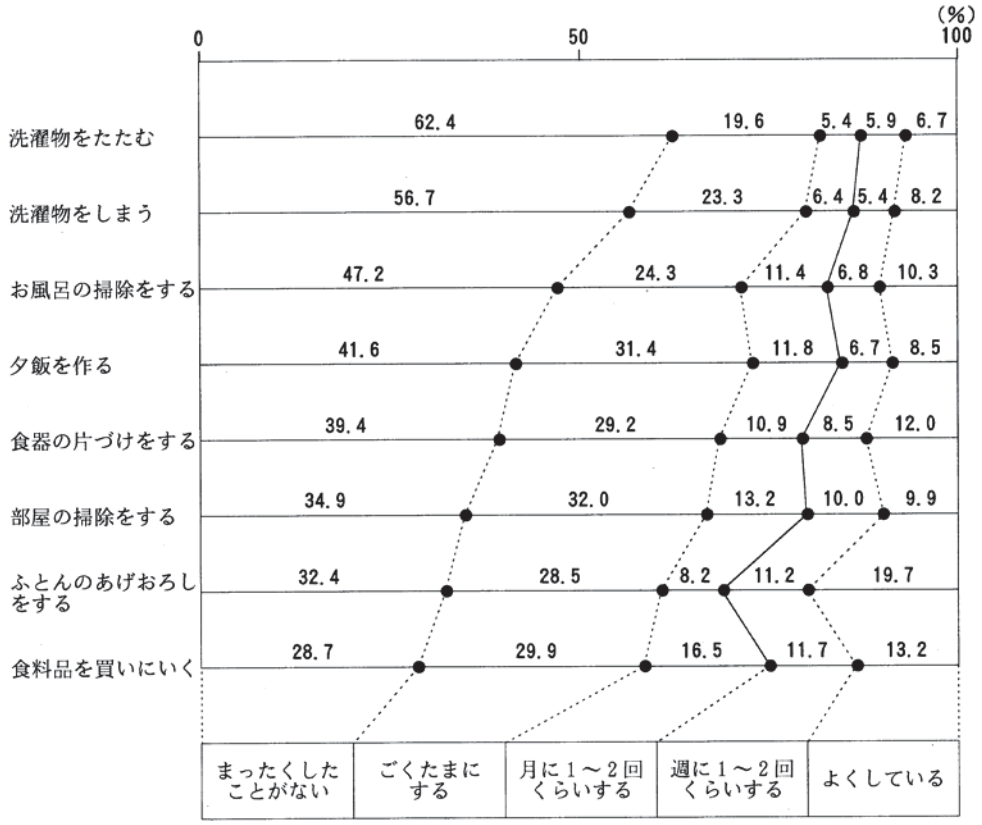
→差が少ない



「とても・かなりそう」の割合

(図26) お父さんはどのくらいするか

→ごくたまにするくらい



第Ⅳ章　男の子らしさと自己評価

1．生徒たちの自己評価

これまでふれてきたように、実際の家庭生活にまでふみこむと、家事は妻の仕事というように性差は残っているように思えるが、イメージレベルでは、男らしさと女らしさとはかなり接近している。

それでは、生徒たちは自分をどう評価しているのか。生徒たちに自己評価を求めた結果は**図27**のように「他人に親切」「がまん強い」などの項目に自信をもっている者が多い。

そうした自己評価を性別でクロスさせてみると、**図28**の通りとなる。

①男子のほうが多い項目

1．他人に親切
2．頼りがいがある
3．体力には自信がある
4．やさしい　　など

②女子のほうが多い項目

1．がんばりや

この図28は、父親と母親とのちがいを１つにまとめた図25と同じように、性差が少ないのが目をひく。特に全体としてみると、性差は少ないが、その中でがんばりぶりに自信があるのは女子というのが興味深い。

それでは、自己評価とは別に、生徒たちはどういう人になろうとしているのか。生徒たちの願いを**図29**にまとめてみた。

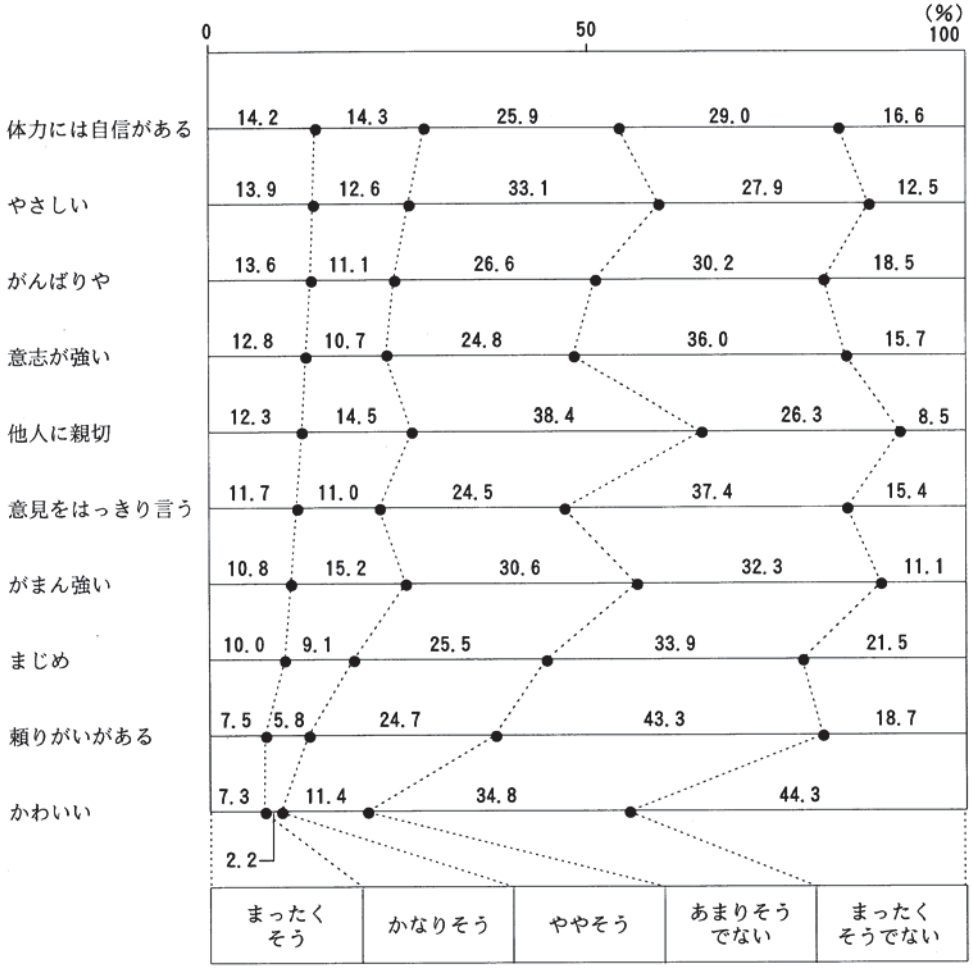
願い
1．スポーツが得意で
2．勉強ができる
3．人気のある子

なんとなく生徒たちの気持ちがわかるような感じがする。この自分についての願いを男女別に分析し直すと**図30**のような結果となる。

全体として、男子より女子のほうが「こうなりたい」というような強い願いをもっているのが目をひく。意欲的で、こうありたいと願うのは男子の特性のように思われるのに、

（図27）あなたのタイプ

→他人に親切



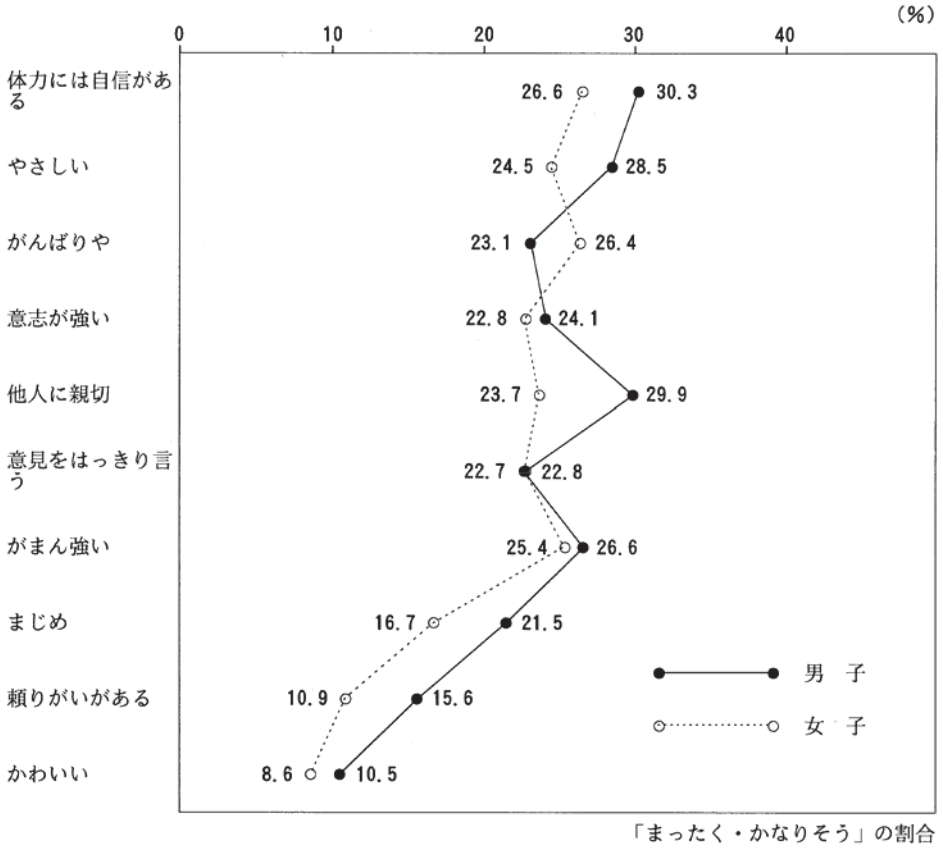
現在では女子のほうが意欲にあふれている。

	女子	男子
スタイルがいい子になりたい	72%	31%
同性から好まれる子になりたい	60%	31%
人気がある子になりたい	69%	41%
おしゃれな子になりたい	53%	21%

このように、女子のほうが意欲的なのであろうが、それにしてもやる気のある女子が印象的で、男子の姿が浮かんでこないのが残念でならない。

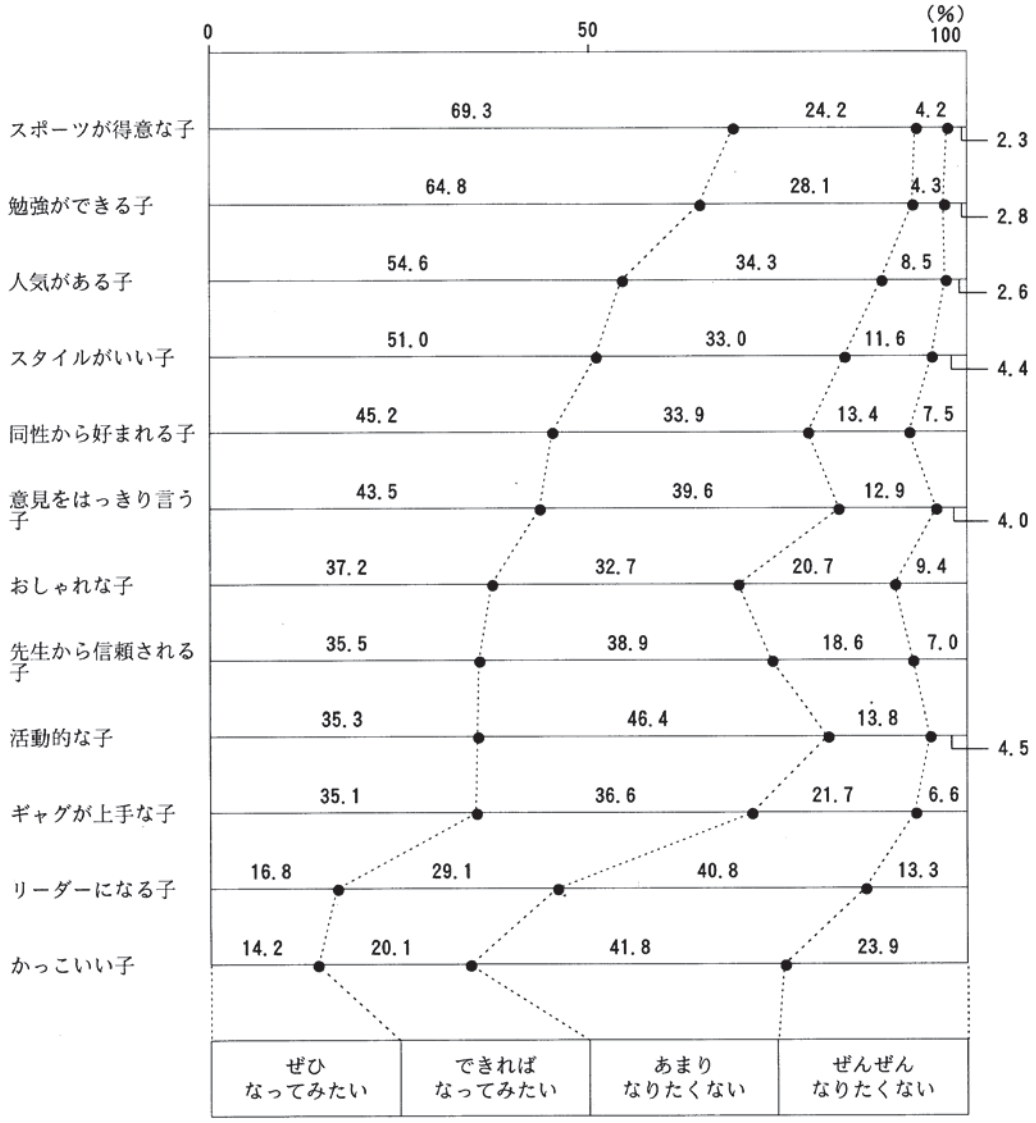
（図28）あなたのタイプ × 性別

→男子は他人に親切



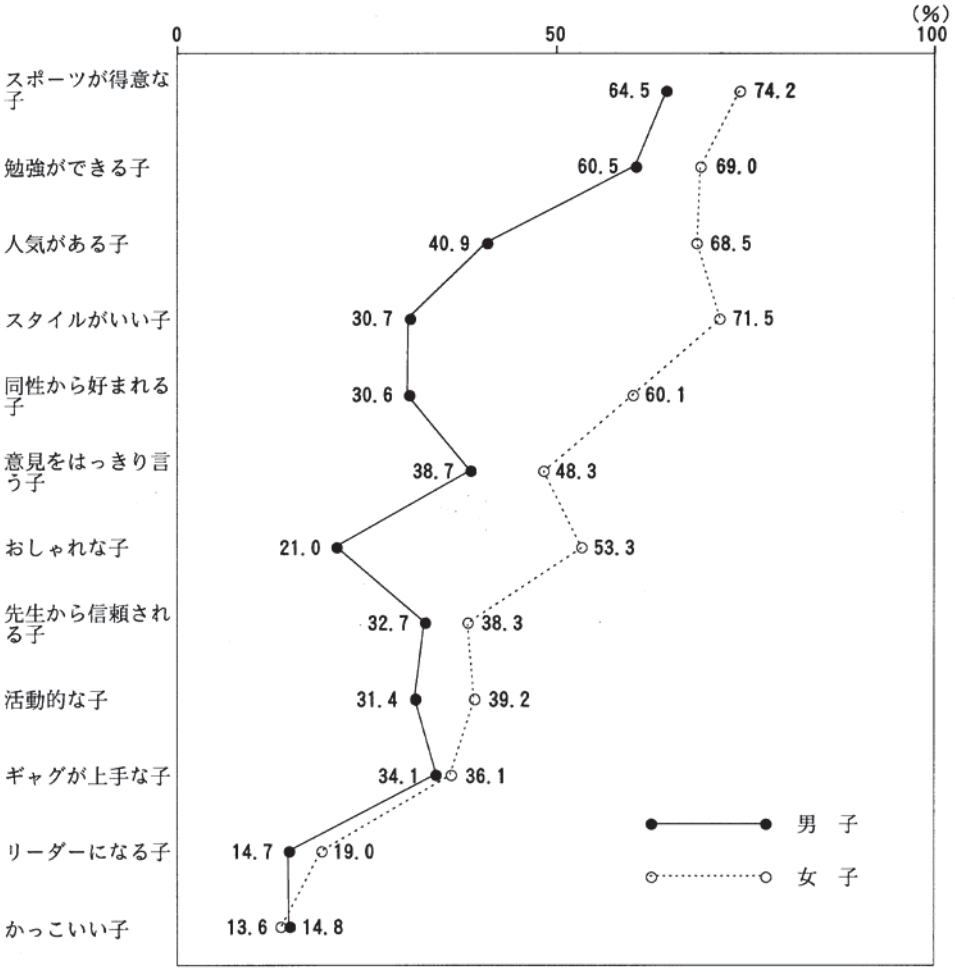
「まったく・かなりそう」の割合

（図29）どんな子になりたいか



（図30）どんな子になりたいか × 性別

└──→女子のほうが願いが強い



「ぜひなってみたい」割合

2.「男らしさ」とは

そこで改めて、「男らしさ」とは何かをたずねてみると、「力が強く、頼りがいがあって、やさしい」が男らしさだという（**図31**）。

それに対し、「女らしさ」については**図32**によると、「やさしくて、あたたかい」のが女らしさだという。そして、**図33**によれば、男らしさ、女らしさの見方に性差が少ないのが目につくが、この男らしさ、女らしさを1つの図にまとめてみよう（**図34**）。

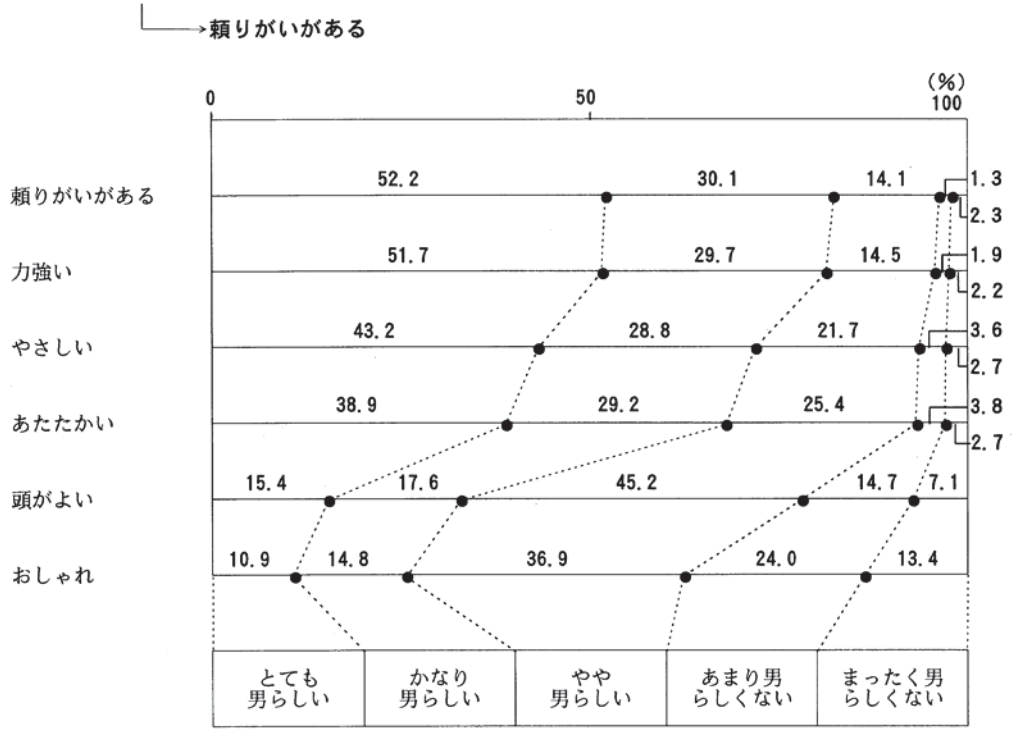
男の子らしい項目 ｛頼りがいがある／力強い

女の子らしい項目 ｛おしゃれ／やさしい

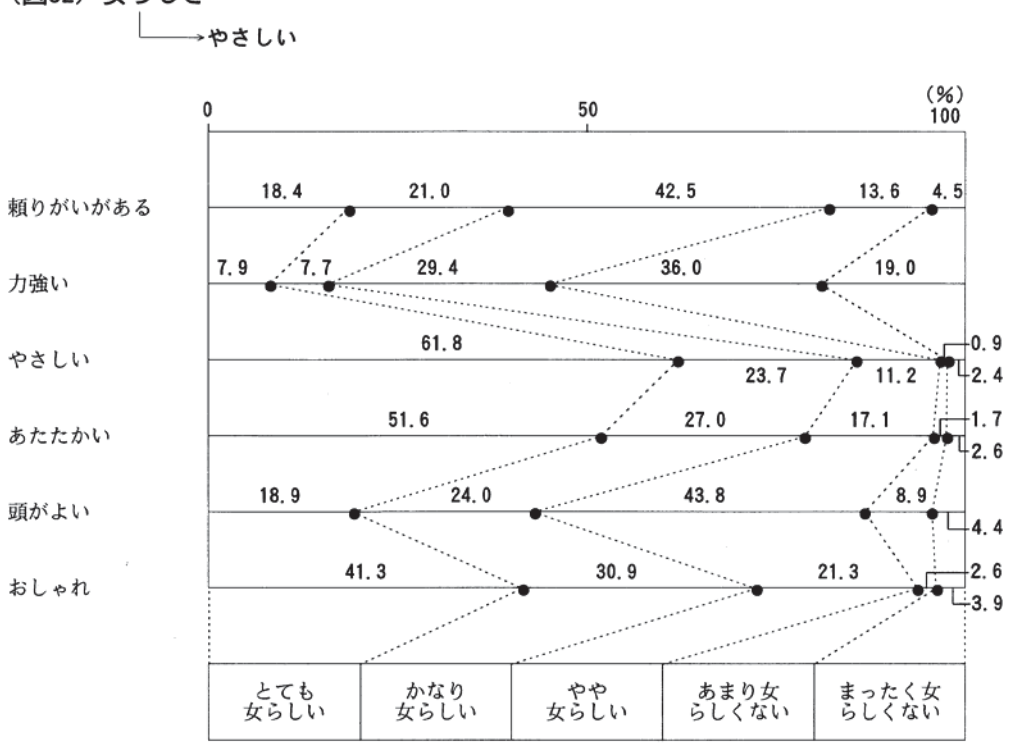
実際の男子は力強く頼りがいのある存在でないのかもしれない。しかし、改めて「男らしさ」と問われると頼りがいのある存在を男らしさと思い、やさしいのを女らしいと思っている。

こうしたデータに目を通すと、男の子らしさは昔とそれほど変わらないようにも思うが、実際の姿は大きく変わっていて、性差は縮小されているのは、すでにくり返しふれた通りである。

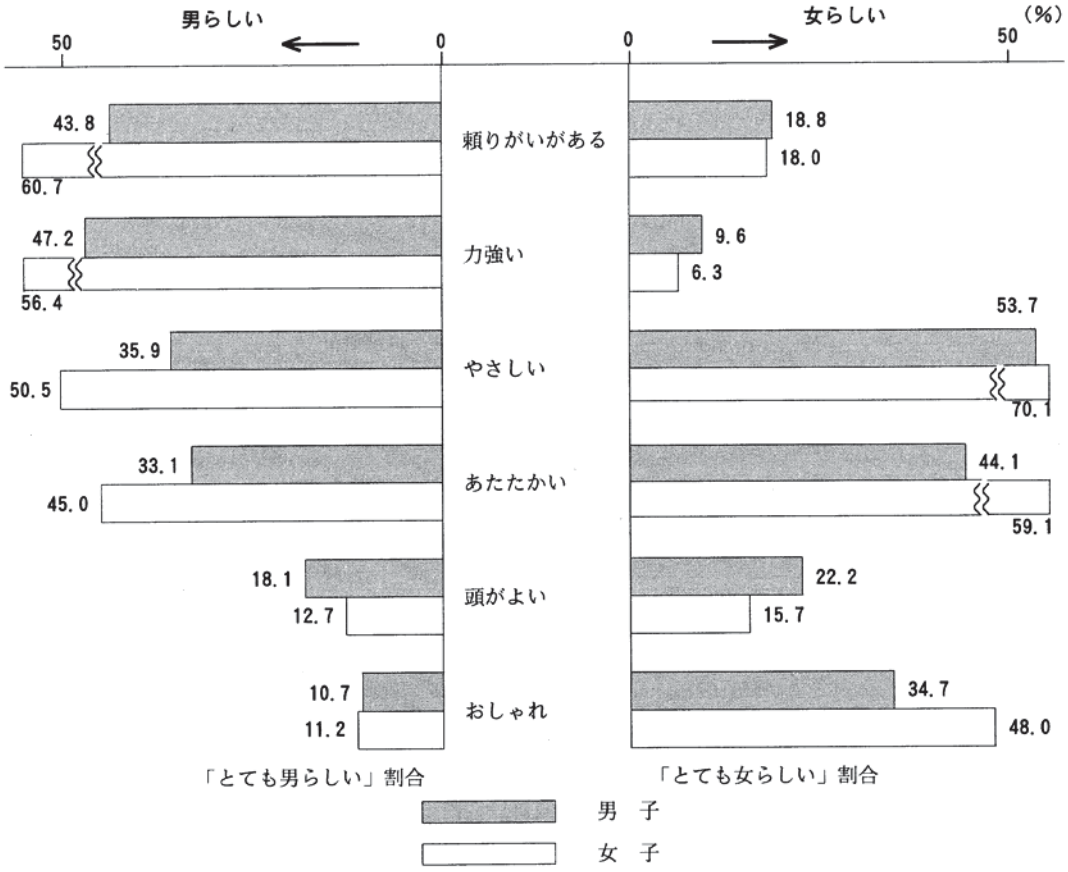
（図31）男らしさ



（図32）女らしさ

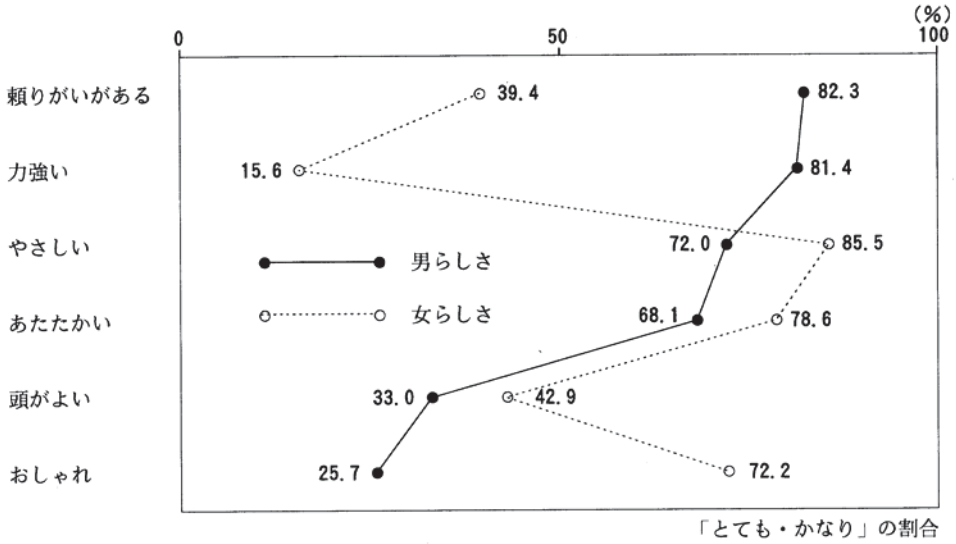

やさしい
(%)
0
50
100
頼りがいがある
18.4
21.0
42.5
13.6
4.5
力強い
7.9
7.7
29.4
36.0
19.0
やさしい
61.8
23.7
11.2
0.9
2.4
あたたかい
51.6
27.0
17.1
1.7
2.6
頭がよい
18.9
24.0
43.8
8.9
4.4
おしゃれ
41.3
30.9
21.3
2.6
3.9
とても女らしい
かなり女らしい
やや女らしい
あまり女らしくない
まったく女らしくない

(図33) 男らしさ・女らしさ × 性別



(図34) 男らしさと女らしさ

└→頼りがいとおしゃれ



3．将来の進路

それでは、生徒たちはこれから先、どう生きていこうとしているのか。そして、そうした生き方に性差が認められるのであろうか。

現在の部活動については**表 2** に示す通りだが、学業成績についても**図35**に掲げたように、成績に自信をもつ者は女子よりも男子のほうがやや多いように見える。

そして将来の進路については、**表 3** に結果を示した。

	男子	女子
むずかしい大学	24%	14%
やさしい大学	15%	11%
小計	39%	25%

男子たちは将来の生活を考えて、むずかしい大学へ入りたいと願っている。皮肉なことにそうした意味では進路にむけてがんばっているのが男の子らしさだといえなくもない。

なお、将来つきたい仕事は**表 4** の通りだが、これを男女別に分けて集計し直すと**表 5** のようになる。

男子 ｛プロスポーツの選手
会社社長

女子 ｛幼稚園の先生
看護婦

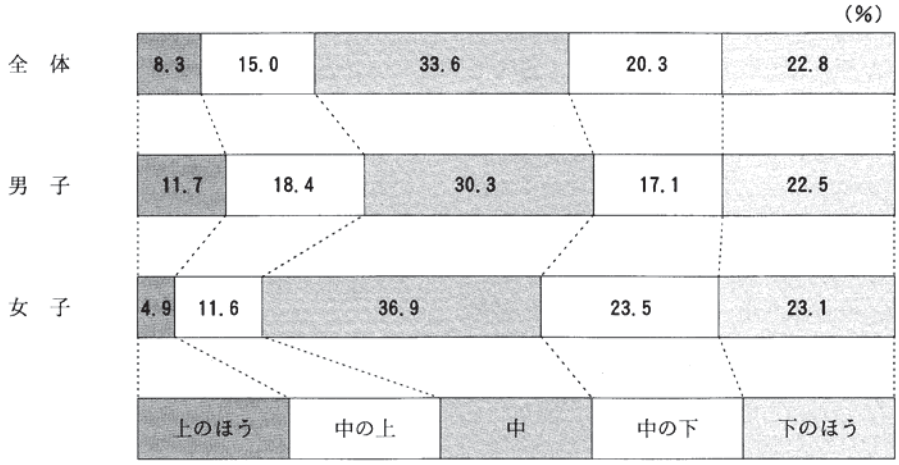
したがって、男の子らしさは失われたといっても、進路になると性差が際立ってくる。こうした領域になると、性差が生き方に関連して、性による開きが強くなってあらわれるのかもしれない。

（表 2）部活動

（%）

	全　体	男　子	女　子
運動部・熱心に活動	39.8	49.4	30.2
運動部・熱心でない	19.9	21.4	18.4
文化部・熱心に活動	7.5	3.0	12.0
文化部・熱心でない	11.3	7.8	14.8
以前入っていたが今はやめた	18.7	14.7	22.7
入ったことがない	2.8	3.7	1.9

（図35）学業成績



（表３）進路

→男子のほうがむずかしい大学

（%）

	全　体	男　子	女　子
中学・高校卒業後就職	19.4	21.3	17.6
専修・専門学校	11.9	7.8	16.0
短大	9.0	1.7	16.4
やさしい４年制大学	13.4	15.4	11.4
むずかしい４年制大学	18.8	23.6	14.0
まだ決めていない	27.5	30.2	24.6

（表４）つきたい職業

（%）

1. 自分で店を経営	26.0	14. 医師	8.9
2. プロスポーツ選手	20.3	15. 科学者	8.7
3. 幼稚園の先生	16.9	16. 声優	8.6
4. 会社社長	16.3	17. 歌手	8.2
5. 公務員	14.8	18. マンガ家	7.8
6. デザイナー	11.8	19. ニュースキャスター	7.7
7. 学校の先生	11.5	20. 大学教授	7.5
8. 美容師	11.3	21. 芸術家	7.4
9. エンジニア（技師）	11.2	22. パイロット	7.3
10. 弁護士	10.9	23. アニメーター	6.3
11. 看護婦（士）	10.2	24. スチュワーデス	6.1
12. タレント	10.0	25. 政治家	6.0
13. 小説家	9.5	26. 新聞記者	5.8

（表５）つきたい仕事・上位５項目

（%）

	全　体	男　子	女　子
プロスポーツ選手	②20.3	①31.6	8.8
自分で店を経営	①26.0	②30.3	②21.6
会社社長	④16.3	③25.1	7.5
公務員	⑤14.8	④20.0	9.6
エンジニア	11.2	⑤18.9	3.4
幼稚園の先生	③16.9	4.3	①29.7
看護婦（士）	10.2	2.7	④17.8
美容師	11.3	4.2	③18.5
デザイナー	11.8	7.0	⑤16.7

＊まとめに代えて＊

調査票を作成しているとき、聞き取り調査をした経験から、生徒たちの間に男らしさや女らしさなどの感覚が失われているのではと思っていた。しかし、調査結果によれば、現代の世相を反映して、性差についてゆるやかに考えている部分が認められたものの、全体としては、生徒たちは、むしろ古めかしいと思われるくらいに、頼りがいがあり、頼もしいのが男子というイメージを抱いていた。

そして、家事や育児をするのは妻の役割と考えているだけに、男子は仕事をする必要があると思う。そのためには、よい大学へ入り、そして収入をもたらす仕事につかねばならないと考えている傾向も目につく。

性的な役割分業のコンセプトがゆらいでいないので、男子たちは頼りがいのある存在になろうとする。しかし、実際には望みの大学へ入れる見通しが暗く、よい仕事につけそうもないと思う。そうなると男子たちは、家事、育児は女子の役割なので、そちらに進出することもできず、かといって社会的な達成もむずかしいので、男らしく生きていくことに自信をもてなくなる。

そうした一方、いくつかのデータで紹介した通り、女子たちは意欲的で、たくましい感じすらする。そうした女子に圧倒され、男子はますます頼もしい存在になりにくくなる。

つまり、現代の男の子たちの間に認められる男の子らしさの喪失は、男らしさのコンセプトが失われたのではなく、むしろ、伝統的な男らしさを生徒たちは十分に身につけようとしており、そうした男性になろうとしている。

しかし、現実の学校生活の中で、彼らの思っているような頼もしく頼りになる存在としての男性の役割を演じられない。というより、女子たちに圧倒され、残念ながら萎縮しているのが男子たちの現状となる。

つまり、男の子らしくありたいと思うものの、そうすることができずに自信を失っている男の子が多いような印象が強い。それだけに、ことさら男の子らしくなくとも、自分なりのマイペースで生きていったらどうか。一流の大学へ入れなくとも、そして、ビッグな仕事につけなくとも、人間としては十分に生きていける。なにもえらくなるだけが人生なのではない。自分なりに納得のできる人生を送っていけばよいのではないか。そうした意味では、男の子としての自信を失った生徒たちに、男の子という固定した枠にとらわれることなく、ひとりの人間として、生きていったらどうかと励ましの言葉を送りたいと思う。男子生徒たちが無理に男の子らしくなろうとがんばり、それが男子たちの自信喪失を招いているのである。

男の子たちに、自分なりの自信をもって生きるのにどうしたらよいか、そうした生き方の指導が大事になってくるように思う。